



# 〈 私たちの折本町の歴史 〉

## 【まえがき】

1985(昭和60)年に発行された 折本小学校創立35周年記念誌『わたしたちのまち/オリジナル版』は、折本町在住の多くの方々の協力と当時の折本小学校の先生方のご尽力により、折本町にまつわる出来事や事柄がまとめられた素晴らしい資料です。

折本町内会のホームページ(HP)編集グループでは、このオリジナル版の内容を再掲するとともに、オリジナル版発行から30余年を経た今日の折本町の状況を振り返りながら、第1話から第20話までを『わたしたちのまち/リニューアル版』として、これまで約2年間にわたって町内会のHPと回覧で順次ご紹介してきました。

このようにしてまとめられてきた資料の内容をみなさま方の記憶に留めていただくと共に、これからの地域社会を担っていく次世代に対する我々世代からのメッセージとして残しておくために、折本町内会ではこれらをまとめ直し、新たに〈私たちの折本町の歴史〉と題した1冊の資料にして発行することにしました。

この資料の構成は、第1～20話の各話とも先ず『わたしたちのまち/オリジナル版』の内容を掲載した後、「第・・話を読んで」と題した読後感を付加したものとなっています。

なお、ここで掲載している『オリジナル版』の内容は、折本小学校創立35周年記念誌から写真も含めそのまま転載させていただいておりますので、同記念誌の編集・発行に関係された多くの方におかれましては、どうぞ上記の趣旨に照らしてこの〈私たちの折本町の歴史〉の発行についてのご理解をいただきたいと存じます。

平成29年1月  
折本町内会

## 【改訂履歴】

- ・2017.3.15: 「少名彦命(すくなひこのみこと)」 ⇒ 「少彦名命(すくなひこなのみこと)」(ページ7)
- ・2020.10.24 「今度は4人もの命が」 ⇒ 「今度は8人もの命が」(ページ12)

## 【目次】

	<u>ページ番号</u>
まえがき	… 1
第1話 土器と折本貝塚	… 3
第2話 淡島社と大熊社の昔	… 7
第3話 早苗地蔵と水路作り	… 11
第4話 観音山の観音様	… 14
第5話 道のわきに建てられたお地蔵様	… 18
第6話 真照寺のハクモクレンと長福寺のイチヨウ	… 23
第7話 折本の竹と野毛山動物園のパンダ	… 28
第8話 横浜線が出来た頃の話	… 32
第9話 バスが通り始めた頃の話	… 36
第10話 第三京浜道路の開通とまちの変化	… 40
第11話 昔の農業	… 44
第12話 港北ニュータウンの新しい農業	… 48
第13話 鴨場のあった頃	… 52
第14話 鶴見川の洪水	… 57
第15話 最初の折本小学校(明治時代)	… 62
第16話 おじいさんが通った頃の学校(大正時代)	… 66
第17話 戦争中の学校	… 70
第18話 独立した頃の折本小学校	… 74
第19話 新しくなった折本小学校	… 78
第20話 変わっていく折本・大熊・川向	… 83
参考情報	… 87
あとがき	… 88



## 〈私たちの折本町の歴史〉

※ 第1～20の各話ごとに《オリジナル版》と《読後感》を順次紹介していきます。

\*\*\*\*\*

### 《第1話 土器と折本貝塚》

今、私たちが住んでいる折本町や大熊町には、大昔から人々が生活していたそうです。このあたりは、ほかの場所と比べると、とても生活しやすかったのです。なぜだと思いませんか？

今では、交通が便利でお店が近くにあるような場所に、たくさんの人々が住んでいますね。でも、大昔の人々にとっては、海や川が近くにあって、少し小高い平らな場所が一番生活しやすかったようです。

海や川が近くにあるとどうでしょう。毎日の食物になる魚や貝をとることが出来ます。大昔、学校のまわりの小高い場所から川向町や鶴見川の方角を見ると、広い海だったのです。そのため、折本町や大熊町のあちこちで、土の中からいろいろなものが発見されました。



竪穴式住居跡

それでは、そのいくつかの場所を詳しく紹介しましょう。

#### 1. 折本貝塚

折本貝塚は、今の第三京浜道路から淡島神社にかけての小高い場所です。

今から300年以上も前からこのあたりには、大昔の人々が捨てたとみられるカキ・ハイガイ・ハマグリなどの貝の殻や、魚の骨・獣の骨などが、10数か所発見されています。



昭和の初めの頃の折本貝塚



このような場所のことを「貝塚」といいます。その後、「竪穴式住居跡」と呼ばれる、大昔の人々が住んでいた家の跡も見つかりました。

今でも山や畑の中で、貝の殻を見ることが出来ます。「貝塚橋」というのは、このようなことから名前が付けられたそうです。

## 2. 折本西原遺跡

今の西原公園のあたりから東方町にかけて、東西に長い台地があります。

近くには、鶴見川と大熊川が流れています。1978(昭和53)年から2年間にわたって土の中を掘り起こしてみたところ、このあたりでも大昔の人々が住んでいた家の跡が80ヶ所以上も見つかり、これが折本村になったとも言われています。

また、たくさんの家の周りには、四角い形をしたお墓の跡があり、その周りは雨水が流れやすいように溝が掘られていたそうです。

## 3. 大熊仲町遺跡

ここには、学校の北側の小高い畑や家が立ち並んでいる場所です。大昔の大熊川は、今よりも大きな流れでした。

1970(昭和45)年の調査では、この辺りでも、あちこちで土の中から家の跡が168件、食物をしまっておいたり、火をつけたりした洞穴125ヶ所、また、獣を捕るための落とし穴がいくつか発見されています。

その他、生活の道具として、粘土を焼いて作った土器や、石を削って作った釣り針・斧など、あるいは、土や石で作った人形・鈴・身に着ける飾りなども出てきました。

このように、今私たちが住んでいる折本町や大熊町のあちこちには、大昔から人々が生活していたのです。今では、たくさんの家が立ち並び、道路が作られて、あまりその跡を見つけることは出来なくなってしまいました。

しかし、そこで見つけられた土器・斧・貝塚の一部や家の跡の写真などが、学校にも残されています。みなさんも、昔から残されている珍しいものは大切にするように心がけましょう。

**〔第1話オリジナル版 おわり〕**

## ～第1話「土器と折本貝塚」を読んで～

貝塚が話題になっていた1965(昭和40)年～1970(昭和45)年頃の様子を記憶されている方々に聞いたお話をご紹介します。

「折本貝塚」が多数発見された場所は、ほとんどが第三京浜道路開通工事に伴って本格的に掘り起こされましたので、その跡地を示すモノとして、橋の名前に「折本貝塚橋」が命名されました。ちなみに、この橋の竣工日は1965(昭和40)年11月です。



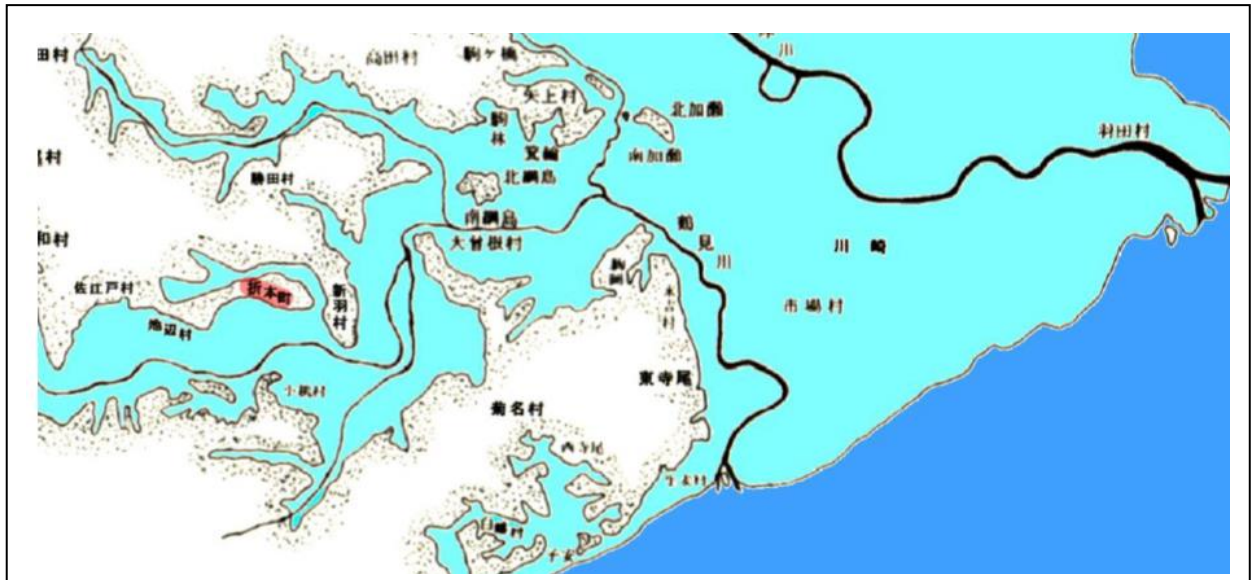
2014(平成26)年現在の  
折本貝塚橋の様子

その後も、時折、貝殻・魚骨を捜しに、この周辺の畑を、“勝手”に掘り起こす探索者がいたそうです。

事実、今でも掘り起こせば、発見できるのではないのでしょうか。貝殻等を実際に畑の中から拾った経験・体験のある在住者は町内にまだまだたくさんいらっしゃいますので、初めてこの折本貝塚のことを知った方は、何かの折りにそういう在住者(工事開始から50年を経ていますので、皆さんご高齢になられております)からお聞きになってみては如何でしょうか。

ちなみに、4組の角田博様(83歳)からこの折本貝塚跡地が生まれた遙か1万年前の頃の生活情景が、私たちにも想像できるようにと、右図のような参考資料、新羽史編集委員会編の「新羽史」(2004年発行・230クラブ出版社)に掲載されています「古鶴見湾図」を見せてもらいました。

この地図を見ると、現在の東京湾がこの折本町にまで食い込んでいる情景を鮮やかに思い浮かべることができると思います。



### 10,000年前～7,000年前の推測図（「新羽史」古鶴見湾図より引用）

上図中央のブルーの色に染めているところは、HP編集グループで1万年前が海であったことをリアルに感じられるように視覚化したものです。（濃い方の青は、今現在の東京湾を示しています。）

さらに、国を挙げてのこの貝塚発掘作業当時は、折本町内の場所を指す表現として、氷川・原・谷戸・淡島・上組・下組・一組・西原・東原などの名称がまだ「日常的」に使われていたようですので、その辺りの由来もお聴きするとおもしろい事でしょう。

淡島神社成り立ちの経緯や、近辺の町に佐江戸と云う名称が有ることから、この折本(織本)が、江戸時代に生きていた当時の人たちの間では、江戸という地域の一部として認識されていたのかも知れないという事が伝えられているそうです。

遺跡の発掘の話に戻りますが、246号江田駅～新横浜駅を結ぶ道路がその後開通されるに当たり、再度、考古学者・研究者・助手たちが本格的に調査に入ったため、今度は弥生時代の居住跡が発見されました。そこから10組と5組をまたぐ橋は弥生橋と名付けられました。

その弥生時代の土器等が集中的に発見された場所は西原公園脇付近(旧折本小学校脇)で、縄文式の土器類が発見されたのは大熊町内だそうです。

〔第1話を読んで おわり〕



## 《第2話 淡島社と大熊社の昔》

折本小学校の近くには、淡島社と大熊社の二つの神社があって、お祭りの時は、町の人たちが大勢集まってにぎわいます。

二つの社は、今から70年ぐらい前に、村の社として祀られるようになりました。淡島社や大熊社の言い伝えをもとにして、昔の様子を調べてみましょう。

### 1. 淡島社のこと

淡島社は、東京が江戸(えど)と言われた頃、30年間ぐらいかかって書かれた「江戸名所図会(えどめいしょずえ)」という本にも出るぐらい名が知られ、180年ぐらい前でも、3月3日のお祭りは、とても賑やかで、江戸からわざわざお参りに来る人もいたのです。



折本村 淡島神社 (江戸名所図会)

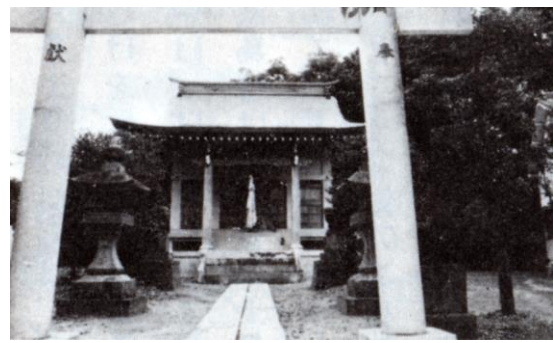
### 「江戸名所図会」の淡島社

お年寄りの話では、お祭りは春なので桜の花が咲く木陰でむしろを敷き、お酒を飲んだりしたそうです。また、綺麗に着飾った女の人や子どもたちでお宮の中はいっぱいになりました。出店や催し物で、身動きが出来なかったそうです。

淡島社は、330年ぐらい前から今の所にあったようで、もっと広がったといわれています。お祀りをしている神様は、少彦名命(すくなひこなのみこと)と神功皇后(じんぐうこうごう)です。

少彦名命は、国を治め、人々に思いやりをかけて、薬の使い方を教え病氣も治したと言われていて、薬の神様として敬われています。

神功皇后は、女の神様で、女の人々の願いを叶えてあげたり、困っている時には助けてあげたりしたので、神功皇后の恵みを受けた人たちは、とても多かったと言われています。



淡島社

淡島社の石碑には、次のような言い伝えが彫られています。

『三百年ほど前は、お宮が見えなくなってしまうほど、桜の木がよく茂っていました。社の近くに住んでいる重郎左衛門(じゅうろうざえもん)さんが、山の中へ掃除に行きました。

そこは、めったに人には会わない山でしたが、重郎左衛門は白い衣を着たおじいさんに会いました。そして腰が痛んで困っていると、おじいさんに話したところ、「淡島社にお願いしてお祈りをすれば治る」といって、風のように姿を消してしまいました。

重郎左衛門は神様が姿をかえて教えてくださったのだと思って、すぐに淡島社へお参りをして、お願いをしたところ、二度と病気にならなかったそうです。そのことがあってから、病気で困っている人たちが、たくさんお参りに来るようです。』

## 2. 大熊社

大熊社のお宮のまわりは、公園や保育園もあり、町の人たちが、ゆっくり休んだり、遊んだり出来る所です。大熊町の公民館、広場があります。

秋のお祭りには大勢の人や出店で賑やかです。みなさんの中にも出かけて楽しんだ人も多いでしょう。



**大熊社**

この社は杉山神社と言われています。昔の詳しい様子は、はっきりしていません。お祈りをしている神様は、日本武尊(やまとたけるのみこと)です。「草薙(くさなぎ)の剣(つるぎ)」などの話で知っている人もいるでしょう。

杉山神社という名前のお宮は、緑区に14もあります。千年も昔から名前が出ていますが、わからない事ばかりといわれています。

しかし、杉山神社のあるところは、どこも鶴見川の周りから遠く離れていません。そして日本中には広がっていないということです。

杉山神社は、大熊町の人たちのお宮として大切にされています。公民館があって、毎月町会の人たちが集まって町のことを相談するところにもなっています。

**〔第2話オリジナル版 おわり〕**

## ～第2話「淡島社と大熊社の昔」を読んで～

淡島社における神事のひとつである『どんど焼き行事』ですが・・・

以前折本町内では、毎年1月14日に、旧5地区(かみ一現1組・2組、ひかわ一現3組・4組、いち一現5組・6組、やと一現7組・8組、はら一現9組・10組)ごとに農道・空き地で、お正月の古札(こふだ)、注連縄(しめなわ)や飾り、門松(かどまつ)等を焼いていました。そして、その燃えている火で、枝先や竹先に刺したお団子を焼いて食べると、風邪等をひかないと親たちから伝えられていました。この風習は「団子焼き」とも呼ばれていたそうです。

しかし、1975(昭和50)年以降は都市化が進んできたため、催事場所の確保が難しくなり、全地区(組)分を淡島境内で神事として催す事になりました。

この『どんど焼き』に関連して、淡島社にある「奉納の碑」の建立までの経過について、淡島社現総代の角田和穂様(1組)にお聴きしたところ・・・

2012～13(平成24～25)年度に、旧5地区にあった「塞の神(さいのかみ)」を淡島社の境内の一カ所に纏めて納めようということになり、淡島社の世話人をされていた10名の方々が私費を投じて、2014(平成26)年5月(実際の設置は8月)に「奉納の碑」を建立する運びとなったそうです。

『どんど焼き』は、今では、町外の仲町台の保育園の園児たちも見学に毎年訪れて来るほど有名で貴重な行事となっています。



上図:「奉納の碑」の全景

下図:除幕式の写真(10人の世話人と宮司)

.....



## ～淡島社の歴史(補足)～

みなさん、二の鳥居の横にある丸い形の「淡島社の由緒の碑」を、きつとご覧になったことがあるでしょう。

この碑には、淡島社は『江戸時代以前に、和歌山市加太の淡島大明神より分祀鎮座』とあります。『江戸名所図会によれば、相模街道大熊村より左に入りて織本村にあり』とも書かれています。



現在の淡島社

そして、かつては近傍の街道に淡島社に至る道しるべ(道跡)があったようですが、『それは、今では消滅されたようである』と書かれています。

…(ところが、この道跡が、東方町の長谷川兼男様の庭宅で発掘され、2000(平成12)年に自費で再建された道しるべを、今、岩崎橋信号の角で見ることができます。)…

「淡島社の由緒の碑」の末尾には、『寛保2年、某英至と云う人が社殿を新築し、昭和51年に道路拡張の為、社殿を(宮司、氏子で)現在のように建て替えた』とあります。



淡島社の由緒の碑

また、碑の裏側には、淡島社にある三基の鳥居建立の年代の違いや、その歴史的経緯についても書かれています。

なお、淡島社が女性の祭神を祀り、縁結び・健康・魔除けの願が掛けられ、崇められるようになった由来については、各地の資料館の諸文献にも紹介されているようです。機会があれば是非ご覧になってください。

〔第2話を読んで おわり〕

## 《第3話 早苗地蔵と水路作り》

みなさんは、堂ヶ坂(どがさか)の所にあるお地蔵様を知っていますか？早苗地蔵と呼ばれているあのお地蔵様には、昔からこんな伝説があるのですよ。

これは、今から450年ぐらい前のお話です。その頃の折本はまだ小さい村で、家も20軒ぐらいしかありませんでした。村人たちは、田畑を耕して細々と暮らしていたのですが、どうしたわけかここ2、3年、日照りが続き、折本の稲は実りの秋を待たずに枯れてしまうことが多くなりました。来る年も来る年も大事に育ててきた稲がまるまるとした実をつける事無く枯れてしまうので、村人たちは、だんだんイライラするようになってきました。



早苗地蔵(さなえじぞう)

これを見ていた了信(りょうしん)というお坊さんは、村が荒れていく様子にひとり心を痛めていて、ある夜、とうとう自分の決心を娘の“つが”に打ち明けました。

「毎年毎年日照り続きで、村々の田はどれも不作だ。これでは村人たちがイライラするのも無理はない。何とかしてあげたい、といろいろ考えたのだが、どうも、山を掘り抜いて谷戸川(やとがわ)の水を引いてくるより他に方法が無いように思うのだよ。」

谷戸川とは、今の犬熊川のことですが、その頃その辺りに住んでいた人は、谷戸川と呼んでいたのです。父の言葉に、つがは大変びっくりしましたが、父の顔に浮かんだ固い決心を見て取ると、黙ってうなずきました。



次の日から、了信は一人で鍬をふるい始めました。村人たちは、「かわいそうに。とうとう了信さんは気がふれてしまったよ。」と、口々に囁き合い、了信の姿を遠くから眺めていました。しかし、もくもくと掘り続ける了信の姿に心打たれたのか、一人、また一人と作業に加わりだしたではありませんか。冷たい北風の吹く頃には、土を掘る者、もっこに入れる者、外へ運ぶ者など、それぞれが一生懸命働いていました。

村中で力を合わせて掘り出してから一年が過ぎ、寒さも和らいできたある日のことです。夕方頃、南側の溝の方から突然ものすごい音と地響きがしてきました。

「ドドドーン。ドドーン。」

「うわああああ。」

山が崩れたのです。掘り進められて深くなり、崖のようになった溝の壁が崩れたのです。この事故で、了信をはじめ三人の村人が岩と土にのまれ、死んでしまいました。

村のために力を尽くした4人の遺体は、川を見下ろす丘の上に埋められました。

指導者を失った人々は深く悲しみましたが、犠牲となった4人のためにも、今まで以上に精を出して働きました。夏が訪れようとしていた時、不幸が再び村を襲いました。またもや土砂崩れが起き、今度は8人もの命が奪われてしまったのです。

二度の事故で12人を失いながらも用水路はとうとう完成しました。長い間の苦労が実り、折本村の田んぼには谷戸川の水が流れ込んでいます。その年の田植えの頃、人々は大切な早苗を何束か持ち寄り、12人が眠っている塚に捧げて、彼らの冥福を祈りました。

その後も、毎年田植えの季節になると、塚には早苗が供えられたので、ここは早苗塚(さなえづか)と呼ばれるようになりました。それから百年ぐらいして、“了信”と“つが”をしのんで塚に2体のお地蔵様が置かれ、早苗地蔵(さなえじぞう)となったのです。

村の人々が協力して作ったこの水路は、今では埋め立てられ、広げられて、道路になっています。そこには昔の面影はありませんが、田植えの季節にお地蔵様に手を合わせて、昔をしのぶのも良いかもしれませんね。



昔のほりわりの様子



今の様子

〔第3話オリジナル版 おわり〕



## ～第3話「早苗地蔵と水路作り」を読んで～

この第3話に掲載されている3枚の写真は、いずれも真照寺住職の雲井耀一さんが記念誌編集時に提供されたものだそうです。

この中の「昔のほりわりの様子」の写真は、1924(大正13)年に切り通し上に完成した『欄干橋(らんかんばし)』です。この橋はその後架け替えられて、「今の様子」の写真のように『真照寺橋』になっています。

HP編集グループは、「堂ヶ坂(どがさか)の切り通し」にまつわる話を、さらに6組の加藤恒雄さん(65歳)に伺ってきました。

加藤さんは、「堂ヶ坂の切り通しは、折本表側の水田地帯(折本耕地と呼ばれていた)の夏の水不足を救うために、灌漑(かんがい)用水路として旅僧父娘・村役人・村民たちが7年をかけて艱難辛苦(かんなんしんく)の末に作り上げた掘り割り(水路)であり、それを昭和の時代に入ってから、先々代の祖父たち村民が協力して暗渠(あんきょ:地下に水路を埋めたもの)排水方式の切り通しにして、折本の裏と表が楽に通行往来できる道として完成させた」と子どもの頃から聞かされていたそうです。

次の2枚の写真は、いずれも加藤さんに提供していただいたもので、1枚目は1934(昭和9)年の暗渠排水道路完成時の写真で、2枚目は1936(昭和11)年の現西原橋に完成した大熊川からの分水堰の写真です。この堰は屋号「ごぼう屋」の家の前にあることから、地元では「ごぼう屋の堰」と呼んでいたそうです。



**昭和9年 灌漑用水堰を暗渠排水  
にして地上を道路に**



**昭和11年 分水堰の完成**

この第3話を読み、加藤さんのお話を聞いて、「堂ヶ坂の切り通し」が現在のようになるまでには、先人たちの大変な苦労があったことが本当によく分かりました。

**〔第3話を読んで おわり〕**

## 《第4話 観音山の観音様》

観音山バス停そばの織本工務店前の山の急な坂道を登って行くと、お堂があって観音様がおかれているのを知っていますか？

まわりには少し土を盛りあげた土塚(つちづか)がいくつもあります。秋になると道が落ち葉で埋まり、登るのも降りるのも靴が滑って大変な坂です。

観音様は、苦しみ、悲しみ、悩む人々を優しく包み、救ってくれる大きな力を持っているといわれています。折本の観音山にある観音様は300年も昔からあるのです。いったいこの観音様はどうして造られたのでしょうか。



観音山の観音様

侍が世の中を治めていた江戸時代の折本の様子を調べてみましょう。江戸時代の終わり頃書かれた本に、その頃の折本の様子が載っています。「土は黒土赤土が混じり、田が多くて畑は少ない。水害も日照りもある。…家は41件。」と書かれています。

その頃はほとんどがお百姓をして暮らしていて、谷川の水を田に引き入れてお米を作っていました。真照寺(しんしょうじ)や淡島宮はもうその頃からありました。

今から400年ほど前の1591年に、折本村の大半を松下常慶(まつしたじょうけい)という侍が治めることになりました。松下常慶は徳川家康に仕えていた侍です。

江戸幕府を開いた徳川家康がまだ若く、小さな岡崎城(今の愛知県)の主だった頃から、松下常慶は家康に仕えていました。家康が近くの国を攻め滅ぼし、国を大きくして強い武将になった時、全国を治めていた豊臣秀吉は、家康に関東の方を治めるように命令しました。

家康は仕方なく関東に移り、江戸(今の東京)を中心に町を作りました。その時、松下常慶は家康から、この折本の土地を治めるように言われたのです。



松下常慶という人は旗本という身分でした。旗本という侍は、戦の時、徳川家康という大将のいることを示す旗の下で、大将に仕えている侍です。大将である家康の指図に従って、命がけで戦い、家康を守ってきた侍です。

侍は、戦で負けて死ぬ人もあり、生き残っても大将が負ければ、勝った人たちに自分の土地を取られ従わされます。だから死に物狂いで戦ったことでしょう。

常に戦に備え、体を鍛え、武器も磨いていたでしょう。勝てば褒美が貰え、ますます強く豊かになれます。

このような世の中で、お百姓は、戦の手助けをさせられ、道や橋や砦を作ったりしなければなりません。時には戦で田畑を荒らされたりして、苦しい思いをしました。また、作ったお米の半分ほどを年貢として侍に納めなければなりません。

松下常慶が折本を治めるようになってから、常慶は先祖の霊を祀る所を観音山の場所に移しました。松下常慶が亡くなった時に、この観音山に葬られましたが、のちに仕事や住まいの関係で、お墓は江戸の市ヶ谷月桂寺(いちがやげつけいじ)に移されました。その後観音様が建てられたのです。そしてこの山も観音山と呼ばれるようになりました。

松下常慶という人は槍の名人だったといわれています。村人を呼んでごちそうをした時に、得意げに米俵二俵(120Kg)を槍に刺し、軽々と遠くへ放り投げたそうです。松下常慶が亡くなった後、常慶の命日には、観音山の観音様の前で酒盛りが開かれました。その時、松下家から村人へ、酒代、肴代として米二俵、墓地の掃除料として米二俵、また読経料としてお寺に米二俵が出されたそうです。

こうして、松下家と折本村の人々の関係は300年近く続きました。しかし今から120年ほど前、江戸幕府が明治政府に敗れたので、徳川幕府の旗本だった松下家は土地を治める力を無くしてしまいました。

そうしていつの間にか、観音様も山の中にひっそりと取り残され、今のように深い竹藪の中に忘れられたように置かれているのです。

遠い400年も昔の事を偲ぶものが折本にも残っているのです。これからも大切にしていって、昔の事を語り伝えていきましょう。

**【第4話オリジナル版 おわり】**



## ～第4話「観音山の観音様」を読んで～

毎日のように眺めている観音山に一度として行ったことがなかったHP編集グループのメンバーは、1月のポカポカ陽気の日連れだって観音山の坂道を通って観音様を見に行ってきました。

坂道は思ったより急でした。観音様は、鬱蒼とした竹林とそれぞれかなりの樹齢と思われる数本の楠(?)に守られて、別世界のような山頂のお堂に静かに座っておられました。

坂道の登り下りで気付いたのですが、道が人手で整備され、ゴミも全く見当たりませんでした。疑問に思っていたところ、ご近所のYさんが定期的に坂道とお堂の回りの清掃をされているとのことでした。・・・ Yさん、いつも有難うございます！

さて、「観音山の観音様」の話にでてくる松下常慶(まつしたじょうけい)さんは、どのような人だったのでしょうか？

いろいろ調べたところ、この人は徳川家康公の信任が厚かった人のようで、家康公が將軍職を退き駿府(今の静岡市)に移った際の駿府城築城の時の功績もあり、城内に「常慶蔵」や「常慶門」の名前がつけられ、大きな屋敷も与えられたそうです。

また、しばらく前まで静岡市には松下常慶が居住していた地域が「常慶町」として残っていたとのことでした。

最後に、松下常慶にまつわる「塩辛すぎるお新香」という話を紹介します。

駿府城に隠居してからのある時の事、奥女中たちが家康公に直訴したことがあった。「毎日のお新香が塩辛すぎます。台所奉行に、塩分を少なめにするように御申し付けて下さりませ」と彼女たちは言った。

家康公はあまり深く考えずに、彼女たちに台所奉行に伝えると約束したのである。そこで、台所奉行の松下常慶を呼んだ家康公は、奥女中たちの要求を伝えた。

しかし、常慶の言い分はこうであった。

「恐れながら、今でさえ奥女中たちはお新香をバリバリと食べてしまうのに、この上、もし塩分を控えれば、どれだけ消費量が増えるかわかりません」

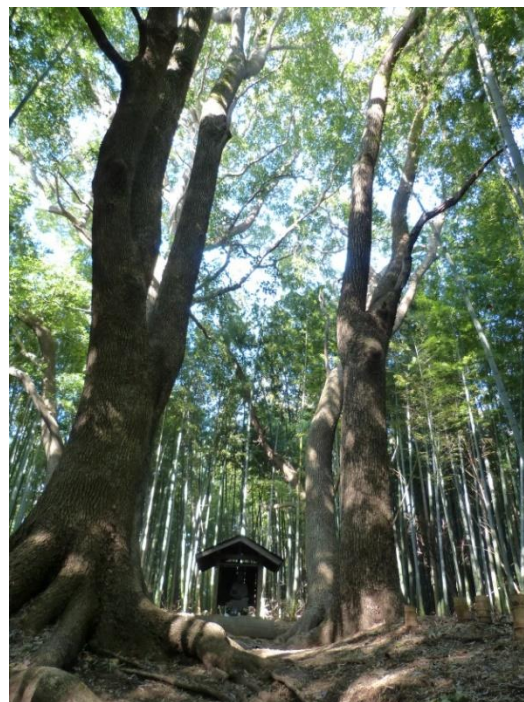
常慶の話を聞いた家康公は納得し、「そうか、このままが良いな」と言ったという。結局、駿府城のお新香の塩辛さはそのままであった。

なるほど、常慶さんは随分しっかりしていた方そうですね。

しかし、毎年の定期健康診断の結果が気になり、いつもお医者さんから「塩分控え目に！」と言われている身としては、「塩辛すぎるお新香」はご勘弁願いたいのが正直なところでは。



観音山の急な坂(上から下を撮影)



竹林や大木に囲まれた観音堂



観音様とお堂



静かなお顔の観音様

〔第4話を読んで おわり〕



## 《第5話 道のわきに建てられたお地蔵様》

町の辻や道端に静かに立たれているお地蔵様。誰でもどこかで出会ったことはあるでしょう。どのお地蔵様も頭をまるめて優しい顔で、まるで子どものように見えます。お地蔵様は、人に良く慕われ、昔から「かさ地蔵」のお話のように語り継がれてきました。

折本や大熊の地域でも数多くのお地蔵様に出会えます。早苗地蔵の他にも、杉山神社から大熊川へ向かう道筋にひとつ。

堂ヶ坂を下りきった交差点の道角にもひとつ。

しかしながら、どのお地蔵様も同じ姿ではありません。地蔵菩薩のように多くは人の姿を借りた形のものですが、舟形の石に乗せられた地蔵菩薩や、表面に文字が刻まれた大きな石だけの庚申塔(こうしんとう)や馬頭観音(ばとうかんのん)のようなものもあります。

これらのお地蔵様は、お地蔵様の近くに住む人々によって、さまざまな願いを込めて建てられたものです。折本町や大熊町の地蔵菩薩は、町の人々が健康で安全にいつまでも幸せであるようにと祀られました。

彌生橋(やよいばし)やゴルフ場近くの庚申塔は、災いが起こらないようにという祈りを込めて建てられたものです。

また、ゴルフ場近くの馬頭観音は、人々の生活を手助けしてくれた家畜に感謝し建てられたものです。

杉山神社の近くに祀られたお地蔵様は、大熊町の人々から「子育て地蔵」として慕われ続けてきました。そんな様子をお地蔵様の近くに住む角田秀吉さんが語ってくださいました。



大熊町下村橋近くの庚申塔



ゴルフ場近くの馬頭観音



私の子どもが、ある晩、急に腹痛を起こしました。ひとまず医者に診てもらいましたが、なかなか治まりません。

そこで、古くから言い伝えられたお地蔵様に早く治してくださいとお願いしました。帰りに、お地蔵様の足元の石を拾って家に持ち帰りました。

私は一晩中、その石で子どものお腹をさすってあげました。すると、おかげさまで明け方になると子どもの腹痛もぴたりと治まりました。

私たちは、さっそくお地蔵様にお礼参りに出かけることにしました。ありがたい石を戻し、赤い布で縫った首かけをかけてあげたのです。子どもがだんだん大きくなっても、お地蔵様の御恩は忘れません。

今でも時折、赤い袈裟をかけてあげることもあります。昔、医者がいなかった頃の人たちは、私たちよりも、もっと深い祈りをささげたのだと思います。

.....

最近、立て替えられたお堂の中の「子育て地蔵」には、真新しい赤い首かけや袈裟が何本もかけられています。そして、お堂の周りは、いつも綺麗に掃き清められていて、色鮮やかな花で飾られています。時には、お地蔵様の頭のとっぺんに、お賽銭が乗せられていることもあるようです。

角田さんの話のように、大熊町の人々は、今までお地蔵様を大切にお祀りしてきました。大熊町だけでなく、そのほかの地域のお地蔵様も、草鞋やお饅頭のお供えなどを受けながら大切に祀られています。

緑の苔にくるまれた小さなお地蔵様も、多くの人々の健康を守り、苦しみや災難から人々を救ってくれる、ありがたいお地蔵様であったようです。昔から、お地蔵様は地域の人々の暮らしと深く結びついてきましたが、これからもずっと、お地蔵様は皆さんの幸せを願い、優しい顔のままで見守ってくださるに違いありません。

【第5話オリジナル版 おわり】



大熊町の子育て地蔵

## ～第5話「道のわきに建てられたお地蔵様」を読んで～

この話は今から30年前に編集されたものです。HP編集グループは、話の中にでてくる「お地蔵様たち」や「庚申塔」や「馬頭観音」がどうなっているか調べましたが、幸いにも殆ど撤去されることもなく元の場所にあるようでした。

ただし、「馬頭観音」だけは観音様の本体はなく、字が刻まれている石碑だけでした。この経緯についてご存じの方は、是非HP編集グループにお知らせください。

第5話では、大熊町の子育て地蔵が紹介されていますが、折本町内の堂ヶ坂を下りきった交差点近くにあるお地蔵様も「子育て地蔵(正式名は子育て地蔵尊)」と呼ばれています。この子育て地蔵尊は、第3話で紹介した「早苗地蔵」と一緒に、毎年3月と9月に地元の地蔵講の人たちと真照寺の住職さんによってお詣りの行事がなされているとのこと。

また、このお地蔵様に隣接している《バーバーワタナベ》のお母さんが、お地蔵様と周辺を毎日きれいに掃除されているそうです。

・・・渡辺さん、いつも気持ちよくお地蔵様の前を通ることができます。大変有難うございます！

さて、「庚申塔」や「馬頭観音」は今日ではあまり馴染みがなくなっているので、それらの由来について調べてみました。

**庚申塔(こうしんとう)**は、中国より伝来した**道教**に由来する**庚申信仰**に基づいて建てられた石塔です。庚申信仰とは、「十干十二支」の考え方に基つき、庚申(かのえさる)の日は不吉な事が起きるとされ、前日から集団で徹夜して祈祷した民間の風習です。

「十干十二支」ですが、年や日を[甲(こう・きのえ)、乙(おつ・きのと)、丙(へい・ひのえ)、丁(てい・ひのと)、戊(ぼ・つちのえ)、己(き・つちのと)、庚(こう・かのえ)、辛(しん・かのと)、壬(じん・みずのえ)、癸(き・みずのと)]と、十二支[子(ね・し)、丑(うし・ちゅう)、寅(とら・いん)、卯(う・ぼう)、辰(たつ・しん)、巳(み・し)、午(うま・ご)、未(ひつじ・び)、申(さる・しん)、酉(とり・ゆう)、戌(いぬ・じゅつ)、亥(い・がい)]の組み合わせで表わすもので、10と12の最小公倍数である60年または60日毎に物事が繰り返されると考えられていました。

明治時代になると、政府は庚申信仰を迷信と位置付けて街道筋に置かれたものを中心にその撤去を進め、さらに、高度経済成長期以降に行われた街道の拡張整備工事によって各地に残存していた庚申塔のほとんどが撤去や移転されてしまったようです。

次に、**馬頭観音(ばとうかんのん)**ですが、元々は観世音菩薩の化身で、人身で頭が馬のものと馬の頭飾り付きのものがあ、いずれも諸悪魔を追払い煩惱を断つ功德があるとされていました



しかし、一般には馬の無病息災としての守り神として信仰されていたようで、我が折本町の馬頭観音は石碑のみ(元は観音様があったのかは不明)ですが、きっとこちらの系統なのでしょうね。

昔の話はなかなか難しく、よく理解できないこともあります、少しは賢くなったような気がしませんか、みなさん！



折本町の子育て地蔵堂



折本町の子育て地蔵



折本町の庚申社



折本町の庚申塔

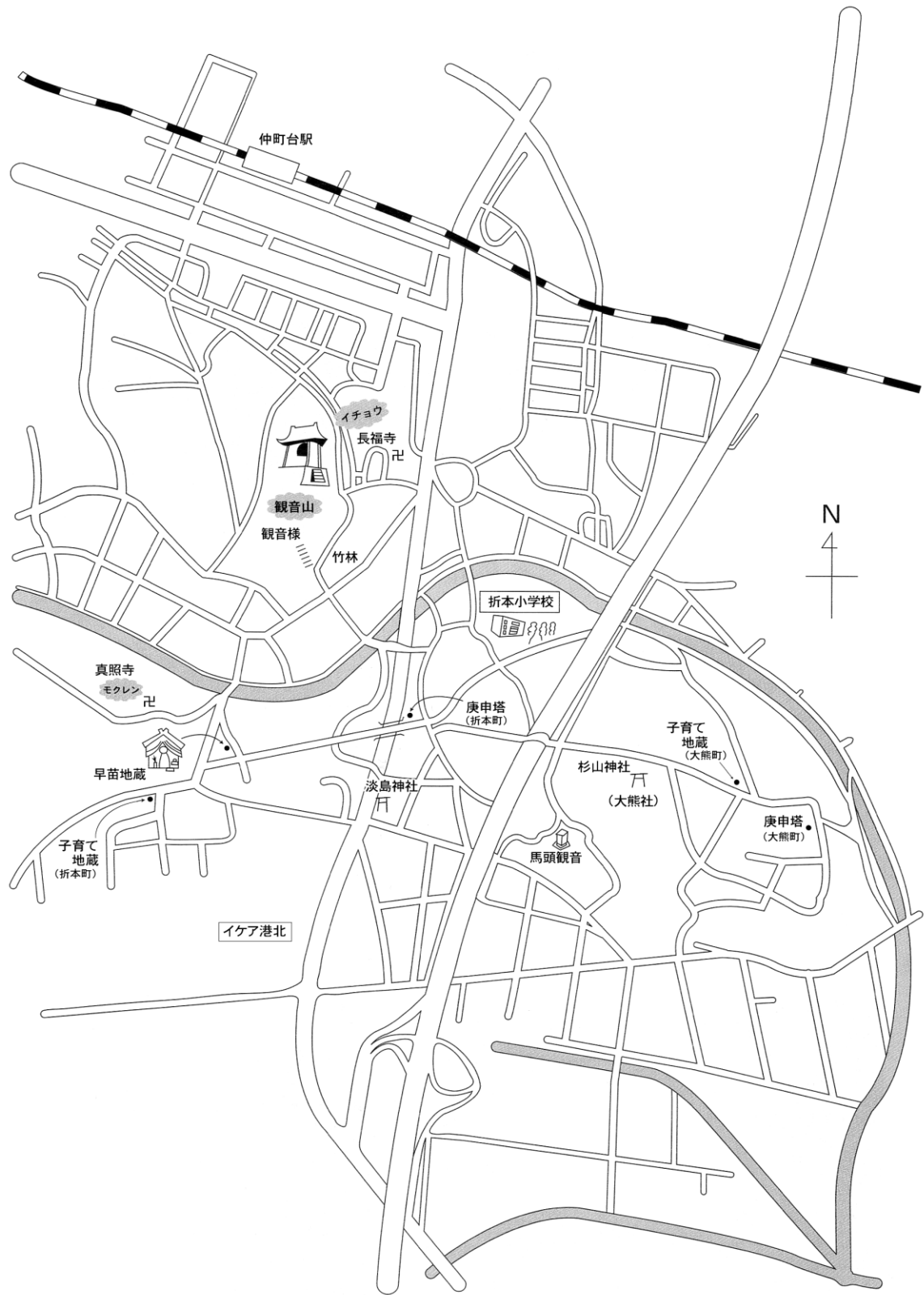


馬頭観音の外観



現在の馬頭観音





折本町近辺にある観音様と地蔵様

〔第5話を読んで おわり〕

## 《第6話 真照寺のハクモクレンと長福寺のイチヨウ》

みなさんは、折本学区にある有名な2本の木を知っているでしょうか。

それは、春がやって来たことをいち早く知らせる真照寺のハクモクレンと、深まりゆく秋のさびしさを教えてくれる長福寺のイチヨウの木です。



真照寺のハクモクレン

この2本の木は1974(昭和49)年に横浜市の名木、古木に決めら

れて、それぞれのお寺の境内で、大地にどっかりと根を下ろし、見事な大木となって、空高く突っ立っています。

ハクモクレンは、428号、イチヨウは、429号として、横浜市の緑政局が指定し肥料をやったり、木の周りに柵をしたりして、少なくなっていく緑を大切に見守っています。だから、勝手に切り倒したり、木の幹に傷をつけたりはいけないのです。

雨にも負けず、風にも負けず、力強くたくましく生きてきたこの二本の大木には、いったいどんな歴史があるのでしょうか。

ハクモクレンの事については、6年生の雲井さんが作文に次のように書いています。

.....

「私のお寺の山門をくぐりぬけると、敷石の左手に沙羅(さら)の木、右手には大王松が天高く伸びています。そして、その前には、木の年齢は130年ぐらいといわれているハクモクレンが豊かな枝を伸ばしています。

このハクモクレンの木の下には、折本の自然をこよなく愛した詩人、佐藤惣之助(さとうそうのすけ)の文学碑が建てられています。

ハクモクレンは、毎年春になると白い花をたくさん咲かせます。

私のお父さんは、子どもの頃、よくこの木に登って遊んだそうです。折れやすい木なので、何度か落ちたことがあるそうです。私は一度も登ったことはありませんが、青い空の中に真っ白に咲くハクモクレンの花を眺めるのが大好きです。

私のひいおじいさんの頃、ひいおじいさんの文学仲間がたくさん集まって、『折本会』を作りました。そして、ハクモクレンの木の下にゴザを敷いてサロンにし、文学の話をしたり詩や歌を書いたりしました。

それなのに、私の大好きなハクモクレンの事を書いた詩や歌が、残念ながら見つかっていません。しかし、私は、この美しい花を咲かせるハクモクレンの事を詠んだ詩や歌があるに違いないと思っています。

.....

小学校からもよく見える大きなイチヨウの木。みんなも写生会でおなじみになった大きなイチヨウの木。夏は、周りの緑に取り囲まれて目立ちませんが、秋も終わりに近づくと、黄色に色づいて遠くからでもひと目でとらえることができます。そして、冷たい北風がピューピュー吹き始めると、葉っぱがヒラヒラと散り始めます。

お寺の鈴木田さんは、  
「落葉を掃き集めるのが大変なんです  
よ。よそ様の庭にまで飛んで行って迷惑  
をかけています。  
『金色の小さき鳥の形して、イチヨウ散る  
なり夕日の丘に』  
という歌そのものの風景ですよ。」  
と、おっしゃっていました。

イチヨウの木には、め木とお木があります。二本一緒に植えないと、銀杏は出来ません。長福寺のイチヨウは、お木一本だけなので、百年以上もたつのに一粒の実も出来ないのです。また、イチヨウの木は、木の皮が厚いので火に強く、少しの火災があっても枯れることはありません。長福寺のイチヨウの木も、防火樹として火災からお寺を守ってきました。また、強い風を防ぐ防風樹としても、その役目を果たしてきました。



**長福寺のイチヨウ**

**〔第6話オリジナル版 おわり〕**



## ～第6話「真照寺のハクモクレンと長福寺のイチヨウ」を読んで～

「横浜の古木名木」とは、横浜市が指定した樹齢が概ね100年以上で、故事・来歴・由緒があるか、又は象徴的樹木として親しまれている樹木です。都筑区ホームページで調べたところ、現在都筑区全体で約30本が指定されているようです。このうち「長福寺のイチヨウ」は仲町台4丁目にあるので、折本町内にあるのは「真照寺のハクモクレン」のみです。これらの古木名木は、それぞれ樹木医による定期的な診断と手厚い治療がなされています。近隣の東方町や池辺町などにもいろいろな古木名木があるようなので、機会をみつけて行ってみたいものです。

.....

さて、HP編集グループは先日全員で真照寺を訪問し、「ハクモクレン」にまつわる話を真照寺住職の雲井耀一さんにたっぷりお聞きしてきましたので、みなさんにもお伝えします。

まず気になっていた当時6年生の雲井さんですが、住職のご長女で今は東京に住んでおられるそうです。

30年前に紹介された「ハクモクレン」は、今でもお寺の山門をくぐり本堂に向かった左手にあり、私たちが訪問した3月11日には開花直前の多くの蕾が暖かい春の訪れを告げていました。

残念ながらハクモクレンのそばにあった「沙羅(さら)の木」はその後倒れてしまったそうですが、右手の「大王松(だいおうしょう)」は今でも威容を誇っていました。

・・・ただ、ご住職によれば、大王松特有の30センチ以上もある長大な松葉(通常の松の葉は2本だが、大王松は3本)の落葉は掃除がとても大変でかなわないとのことでした。>



真照寺本堂から山門に向かって  
(左に大王松、右にハクモクレン)

真照寺にはこのほかにも多くの樹木があり、訪れた人の目を楽しませてくれます。これらの中の代表的な樹として、ハクモクレンの本堂寄りに恐らくは樹齢100年を超える巨大な「サルスベリ(百日紅)」があります。サルスベリの花は真夏に咲くので、我々が勘弁してほしくなるような猛暑日でも、きっと周囲から抜き出でて咲き誇っていることでしょう。

しかし、このサルスベリもよく見ると、根元近くの太い幹は芯の部分が大きくえぐられており、周囲部分だけで持ちこたえているようでした。  
…く木々の面倒をみていくのも、きっといろいろなご苦労があるのでしょうか。)



**真照寺のサルスベリ**

ところで、みなさんはこの第6話にでてくる真照寺ゆかりの《佐藤惣之助[さとうそうのすけ: 1890(明治23)年～1942(昭和17)年]》という人をご存知ですか。佐藤惣之助さんは、年配の方は誰でも知っている川崎出身のとても有名な詩人・作詞家です。

佐藤惣之助は多くの詩集を出したほか、「湖畔の宿」「赤城の子守唄」「お夏清十郎」「青い背広で」「すみだ川」「人生の並木道」「人生劇場」等の歌謡曲だけでなく、今も熱烈な阪神タイガースのファンに愛唱されている「六甲おろし」の作詞家でもあります。  
…く実は筆者もここまでは知らなくて本当に驚きました！)

この話でも紹介されているように、真照寺と佐藤惣之助さんとの繋がりを説明するには、「6年生の雲井さん」のひいおじいさんの《雲井麟静[くもいりんじょう: 1884(明治17)年～1971(昭和46)年]》という方に登場してもらう必要があります。

この方は真照寺第17世住職(現住職・雲井耀一さんの祖父)で、生前、折本町を中心に幅広い文化活動を展開してきた人でした。絵画や文章をたしなむ文人でもあり、音楽や演劇に造詣が深く、多くの文化人との交流も盛んでした。

雲井麟静さんは、その多芸多才ぶりを発揮し、小学校で教職にも就きながらハーモニカ楽団を創設してその指導に尽力されたそうです。



さらに、青年の非行化防止の一環として当時の都田村に劇団「都田・櫻月会」を設立して、淡島神社で定期公演をしたり、折本町の歌「折本音頭早苗節」を残すなど地域文化の向上に努められたそうです。

…〈正に折本町の大恩人ですね。〉

さて、雲井麟静さんと深い親交があった佐藤惣之助さんは、1920(大正9)年～1942(昭和17)年の23年間にわたって毎年真照寺を訪れ、同行の仲間と文学論や芸術論を語ったり、折本の方たちと交流していたとのこと。

…〈余程折本の地が気に入っておられたのでしょうかね。〉

せっかくここまで書いたので、佐藤惣之助の詩句をいくつか紹介しましょう。

「大なる田舎 光栄の川 自然の祭」  
…真照寺境内の詩碑の句で詩集『満月の川』に収録されている。

「清らかな水をたたえよ ここに村の命の川は開きし」  
…雲井麟静作の『生命の泉[1922(大正11)年発行]』に惣之助が贈ったもの。『生命の泉』には、小学校の副読本でもとりあげられ、第4話でも紹介した「堂ヶ坂の切通し」の話が書かれている。

「おもひでの ゆめよ五月の くさの中」  
…亡くなる前年の1941(昭和16)年に真照寺を訪れた際に残されたもの。画家の鈴木保徳の絵に惣之助自筆の句が書かれたものが真照寺にある。



**真照寺境内にある惣之助の詩碑**

…〈いずれも、佐藤惣之助さんの「折本の地」と「折本の自然」に対する深い思いが伝わってくる詩句ですね。〉

**〔第6話を読んで おわり〕**



## 《第7話 折本の竹と野毛山動物園のパンダ》

今、野毛山動物園にはオスとメスの二頭のパンダがいます。

オスの名前はコロちゃん、1979(昭和54)年に中国からやって来ました。メスはまだ名前がありません。1983(昭和58)年に神戸の動物園からコロちゃんのお嫁さんになるためにやって来ました。パンダといっても、白黒のジャイアントパンダではありません。レッサーパンダといって、体長50~60cmの、しっぽの長い、茶色い毛でおおわれた、かわいい動物です。レッサーパンダはとてもめずらしい動物で、日本国内の動物園には24頭しかいません。

レッサーパンダのふるさは、中国北西部、四川省の竹林です。高い山(標高2000m)で生活しているので、体の毛が長く、足の裏まで毛がはえています。

また、木登りが上手で、昼間は木の上でまるくなり、長いしっぽで頭を包んで寝ています。夜になると地面に降りてきて、竹や筍、草、くだもの、鳥の卵、ネズミなどを食べます。



レッサーパンダ

さて、動物園のレッサーパンダは、何を食べているのでしょうか。飼育係の沖さんに聞いてみました。

レッサーパンダの餌の代表は竹です。竹を一日中好きな時に、好きなだけ食べられるよう、たっぷり与えています。レッサーパンダは気に入った葉しか食べないので、捨てる所が多いそうです。その他にバナナ、りんご、トマト、にんじん、ふかшейモや季節の果物(もも、ぶどう、みかん、メロン)を1cmの角切りにしたものに生卵、ミルクを混ぜ、カルシウムと粉を加えた栄養たっぷりの餌を夜1回だけ食べているそうです。

竹の他に、いろいろな果物や野菜、卵、ミルクを食べているなんて、ずいぶん贅沢ですね。でも、果物や野菜はお店で買えますが、竹はどうやって手に入れるのでしょうか。

動物園では、横浜市内の竹やぶを探して、パンダの餌にする竹を分けてもらうことにしました。初めは緑区元石川町にあった竹やぶでしたが、新しい家を建てるために竹を切り倒してしまいました。

そこで、違う場所に竹やぶを探したところ、折本町に大きな竹やぶがあることがわかりました。さっそく、竹をわけてもらうよう、お願いしました。そして、月2回、しまうまトラックで竹をとりに行くことになりました。



しまうまトラックに竹をつんだところ

竹やぶの持ち主の加藤さんは、動物園からトラックが来る日は、朝早く竹やぶに行って、パンダが食べやすいように、なるべく新しい竹をとります。1回に4～6本の竹を切り倒し、葉だけを取って、縄で縛っておきます。葉の量は、だいたい40kgで、これが2週間分の餌になります。

竹やぶは、学校の北西の方向にあります。みなさんも新しい道路の向こう側に、竹がたくさん生えている山があるのを知っているでしょう。あの山の竹が、パンダの餌になっているのです。



竹をとる加藤さん

昔、折本には竹やぶがありませんでした。明治の終わり頃、筍栽培のために、港北区勝田町から竹を取り寄せて植えたのが始まりです。

今では、広さが四反(畳2400枚分)にまでなりました。春になると、やわらかくて、おいしい筍が約1500kgも取れるそうです。

けれども、この竹やぶの一部が港北ニュータウンになることに決まりました。横浜市の人口が増え、土地の開発も進んでいますが、大切な緑をいつまでも残しておきたいものです。そして、野毛山動物園のパンダに、ずっと餌をあげられるといいですね。

【第7話オリジナル版 おわり】

## ～第7話「折本の竹と野毛山動物園のパンダ」を読んで～

レッサーパンダは子どもたちに人気の動物です。現在横浜市では、「野毛山動物園」と「ズーラシア」にいるそうです。

話にでてくるコロちゃんその後どうなったかが気になったHP編集グループの担当記者は、さっそく野毛山動物園に取材に行ってきました。

ひょっとしてコロちゃんの子孫がいるのではないかと淡い期待を抱いていたのですが、野毛山とズーラシアで飼われているレッサーパンダは、コロちゃんとは血縁関係はないそうです。残念！



癒しの動物：レッサーパンダ  
(「よこはまのどうぶつえん」のHPより転載)

時々テレビで、「XXの動物園で〇〇の赤ちゃん誕生！」というようなニュースを聞きますが、元は野生の動物たちが子孫を残していくというのは、本当は非常に大変なことなのでしょうね。

また、現在の竹の仕入れ先についても聞いてみましたが、詳しくは《機密事項》だそうで、「横浜市内のどこか」としか教えてもらえませんでした。

さて、第7話の写真で登場している「竹をとる加藤さん」は、6組の加藤恒雄さんのお父さん(故人)だそうです。第4話で皆さんにもご紹介した観音山周辺の竹やぶから加藤さんが切り出した竹が、月2回野毛山動物園に運ばれていたのですね。納得！

ところで、第7話によれば、明治時代の終わり頃まで折本には竹やぶがなかったようですが、今では町内にはかなりの竹やぶがありますね。

私たちがいつも見ている竹は『マダケ属のもうそうちく(孟宗竹)』らしいです。これら竹類の成長力は強く、ピーク時は1日に1m以上伸びることもあるようです。



また、地下茎が横に這って、随所から地上に筍(たけのこ)として茎を出し増殖していくことから、放置された竹やぶは密になって荒れるとともに、周囲の里山や田畑にひろがり、全国で環境上の問題となっているようです。



折本歩道橋から見た現在の観音山  
(山の半分くらいは竹で覆われている)

しかし、何といても私たちに馴染み深くて楽しみなのは、春の筍ですよね。この季節の筍は、肉厚で柔らかく、えぐみもなく、煮てよし、炒めてよしでとても美味ですね！

以前テレビで、近隣の地域の若者や子どもたちが竹やぶに入って、筍掘りや竹の伐採や竹細工を楽しみながら、「竹やぶ」を景観のよい「竹林」に変えていくような企画イベントを見たことがあります。…折本町でもこのようなイベントができるといいですね！

また、聞いたところでは都筑区に「竹やぶ愛護会」なるものがあり、竹をチップにして家畜の餌にしたりしているそうです。

このような様々な活動を通して竹への関心が高まっていくことを期待しましょう！

【第7話を読んで おわり】

## 《第8話 横浜線が出来た頃の話》

みなさんは、横浜線に乗ったことが何回もあると思います。緑色や青色の長い車両で、お客さんをたくさん乗せていますね。おじいさんやおばあさんの子どもの頃は、ほとんどの人が横浜線に乗ったことが無かったようです。

折本の人が横浜線に乗る時は小机駅まで40分ぐらい歩いて行きました。鉄道好きな男の子たちは、学校が終わると汽車を見るためによく小机まで行き、田んぼの真ん中にあるレールに耳をあて、列車の響きが遠くなったり近くなったりするのを確かめながら遊びました。

汽車の本数が少ないのでのんびりとしていたようです。

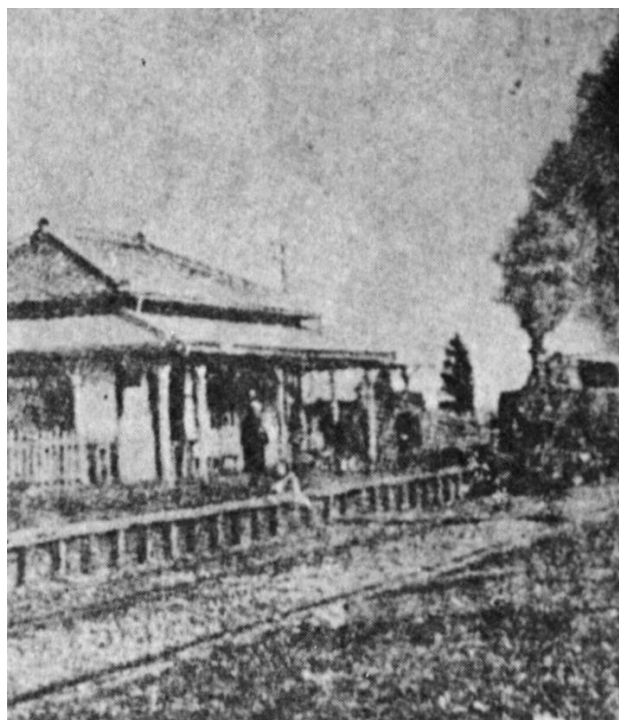
おじいさんの子どもの頃の横浜線は、二等車が青で三等車が黒の客車でした。汽車の中の床や椅子などは、木で出来ていて、列車の前が客室になっており、後ろは貨物車でした。車両が短いのでホームも小さく、汽車が着くと放送を通さなくて駅員さんが大きな声で案内をしてくれました。

みんなが「駅」と使っている言葉も、鉄道が出来たばかりの頃は「ステーション」と外国の言葉で呼ばれていました。東神奈川の駅には、赤帽をかぶって赤い鼻緒の草履を履いた男の人が、サンドイッチやお寿司などを笹折に入れ、お弁当を売っていました。

大きな道路の踏切では、踏切番がいて、白い旗を振って安全のサインを汽車の運転手に送っていました。

横浜線が八王子と横浜の間を結んだのは二つの理由がありました。

一つは生産地から買い集めた生糸を横浜の港からアメリカへ送るためでした。もう一つは、セメントの原料としての石灰岩を奥多摩の五日市から川崎の工場へ運ぶためでした。



明治時代の横浜線

新宿と八王子の間に中央線が開通した時は、東京周りで横浜へ原料が運ばれていましたが、横浜の商人が横浜と八王子の間に鉄道を通すように粘り強く運動を繰り返したのち、やっと政府から許可があり、横浜鉄道株式会社が出来ました。

横浜線の鉄道を通す初めの計画は、東神奈川から小机をへて、川向橋あたりで鶴見川を渡り、その頃を中心地であった川和を通す予定でした。しかし、川和の人たちが鉄道を通すことに反対したり、鉄橋を二つかけるお金が鉄道省になかったりしたため、中山・長津田を通すことになったのです。

1908(明治41)年9月23日に、八王子と東神奈川の間に汽車が通るようになりました。初めて横浜線を見た人は「火事が長屋をひっばっている」と、言ったそうです。

黒い煙をモクモクはきながら動く汽車は、トンネルの中に入ると、いっぱいススを出しました。ススで顔が汚れるので、トンネルに入る時は汽笛の「ポー」の合図でお客さんは窓を閉めました。

小機のトンネルに入る時「ポーポー」と鳴る汽笛の合図は折本までよく聞こえました。

折本の農家の人たちは、朝一番の列車の汽笛で目を覚まし、仕事を始めました。

1日に6回くらいの往復で、乗り遅れたら次の汽車が来るまで3時間も待たされました。通りかかる汽車にお客さんが手を振ると汽車を止めて乗せてくれたり、途中の駅でトイレに行けるほどのんびりしていました。



今の横浜線

その頃の運賃は、長津田から東神奈川まで23銭で今の700円ぐらいです。着くのに1時間もかかったそうです。

明治の頃の汽車も今では電車に代わり、横浜線に乗る人もずいぶん多くなりました。

【第8話オリジナル版 おわり】



## ～第8話「横浜線が出来た頃の話」を読んで～

この話を読むと、鉄道が国の産業の発達と地域の開発に密接に関わっていることがよく分かります。

それにしても、黒い煙をモクモクはきながら動く汽車を、「火事が長屋をひっばっている」とは面白い表現ですね。

さて、横浜線と折本町の人々との繋がりについてHP編集グループ員が調べましたが、この第8話に記載されているような電化前の横浜線を走る蒸気機関車の汽笛の音を聞いた記憶のある古者には残念ながらお会いすることはできませんでした。

しかし、電化になってからの貨物列車が通る時のガタゴト音は聞こえてきた事を鮮明に覚えている方は何人かおられ、お話によれば、夜などは、童謡にある”夜汽車”の雰囲気的一端のように、確かに遠くからレール音を鳴らして通過しているのを感じることができたそうです。

今では、想像ができない折本の住民もおられるかと思いますが、東海道新幹線開通に伴って新駅開設となった「新横浜駅」が1964(昭和39)年にできるまでは、ここ折本の各家の縁側から(ちょっと古い表現?)でも小机駅まで見渡せて、ガタゴト音だけではなく、列車・客車そのものも当たり前のように見えたそうです。

当時は、小机、新横浜まで延々と田んぼが広がっており、春には、その田んぼも田植えが始まるまでは、レンゲが咲き誇っていて、そのレンゲ田んぼの中で、男の子たちは野球をして遊んでいたりしたそうです。

また、鶴見川も今と比べれば十分にきれいで、夏は、小机堰に行っては川遊びや泳いだりしたとのこと。田んぼの周りの用水ももちろんきれいで、メダカ、フナ、ドジョウも普通に生息しており、夏の夜には蛍もあちこちで見られたようです。

そして、横浜港での花火もきっと大きく見えたことでしょう。・・・(これは、今でも、折本の高台にお住まいの家からは見えますね。)

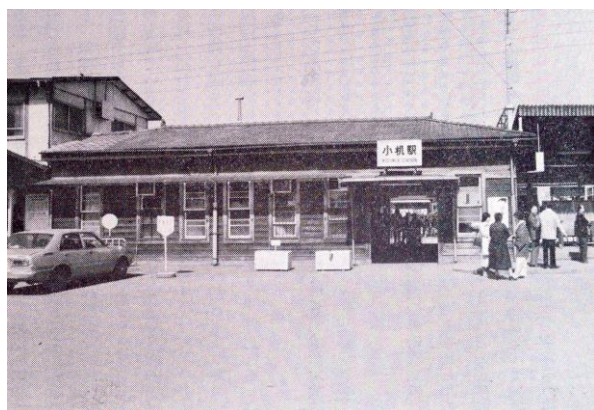
時代を少し遡って第2次大戦後の間もない食糧難の頃は、鶴見川の土手では、自給用にジャガイモ、トマト、ナス、サツマイモ等の野菜を育てている情景がこれまた普通のようにあったそうです。セリ、ノビル、ヨモギ等も取ってきては市場に出すこともあったようです。

しかし、同時に鶴見川の氾濫による浸水(田んぼはもちろん道路も)被害も経験し、逆に夏の日照り続きで、田んぼに入れる水に難儀をきたした時期もあったそうです。

第3話の「早苗地蔵と水路作り」ほどの苦難ではないのですが、大熊川、谷戸川、江川、鶴見川、そして今の折本交番の所にあった池の水をポンプで汲み出したりして、田んぼでのお米作りに精を出した苦労も味わったそうです。夜空はもちろん、周囲は一点の光も無い時代だったからいわゆる満天の星空だったとのことでした。

当時はみんな大変だったけど、今思うといい時代だったのでしょうか・・・。

.....



昭和50年代の小机駅  
(「港北区郷土史」より)



今の小机駅表口（南出口）

.....

〔第8話を読んで おわり〕

## 《第9話 バスが通り始めた頃の話》

**熊男**「おじさん、こんにちは。宿題で、バスが走り始めた頃のことを調べることになったの。その頃のことを知っていたら教えてください。」

**おじ**「熊男は野球が好きだが、横浜スタジアムへはどうやって行っている？」

**熊男**「僕は、新開橋からバスで新横浜へ行って、それから横浜線で東神奈川、そこで乗り換え、確か関内駅で降りたと思うよ。1時間もかからなかったな……。」

**おじ**「よく覚えているね。今はバスが通っているから、あまり歩かないで楽に行けるが、バスが通っていなかった頃、この辺の人は、どうやって横浜の方へ行ったと思う？そう、よくわからなくて当たり前。私もよくわからないので、生まれた時からずっと折本に住んでいるおじいさんに、そのことを聞いたことがある。そのことを話してあげよう。」

**おじ**「その頃、折本から一番近い鉄道の駅は小机の駅で、鴨場のあたりを通り、鶴見川の堰にドンドン橋といって、丸太の杭の上に板を乗せた簡単な橋がかかっていた。そこを渡って40分ぐらい歩いて行き、そこから横浜線に乗って行ったそうだよ。また、ここから一番近いバス停が川向町にあった。今のバスの折り返し場のあたりかな。そこまで歩いて、やっとバスに乗って行ったそうだよ。」

**おじ**「ところで、その頃折本小学校のあたりは、家の数もずっと少なく大部分の家が農家で、朝早く星の見える頃起きてきて田や畑に行き、夕方星の見える頃まで働き、鍬やとれた野菜などリヤカーに山のように積んで、疲れた足を引きずるように引っ張って帰って来たとか聞いた。市場へ野菜を出すにも牛車に積んで市場などへ、牛と一緒に歩いて運んだとか聞いている。熊男に想像出来るかな。」

また、高校生も小机の駅まで毎日のように歩いて通い、誰もがどこへ行くにも歩くのが当たり前だったそうだよ。」



1951(昭和26)年頃のバス

**熊男**「それで、いつ頃この辺にバスが通るようになったの？」



**おじ**「土地の人に聞いたがわからなかった。そこで市役所の交通局の人に調べてもらったことを話してあげよう。1953(昭和28)年8月1日に通ったそうだよ。鶴見駅から綱島、学区を通して川向町まで、今の41系統かな、11.92km、3区間に分かれていて、料金は1区間15円、3区間通して乗ると35円、1日に5往復、3時間に1本ぐらいのわりかな。だから乗りたい時に乗れないし、汗水流して働いて稼いだお金をバス代に使うのはもったいないと思うのか、みんな駅まで歩き、乗る人は少なかったそうだよ。」

**熊男**「バスが通るようになって、みんなが喜んだと思ったら、そうでもないんだね。」

**おじ**「どうもそうらしい。だが1965(昭和40)年に第三京浜の自動車道が開通し交通の便が良くなってから、インターチェンジの近くにたくさんの工場が出来、そこへ通勤する人が増え、また、この近くから横浜や東京方面に働きに行く人たちの家や、アパートがたくさん立つようになってからは、学区を通る市バスも増え、一昨年は新横浜-江田線(300系統)が開通し、今では6系統、158往復になったとか、大変便利になったようだね。」



### 学区を通る市営バス路線

**おじ**「話が変わるが、横浜にバスが通り始めたのは、1928(昭和3)年(今から57年前)の11月、その頃からずうっと若い女の車掌さんが、どの路線バスにも乗っていて『発車オーライ、次は〇〇です』なんて言ったり、車の中で切符を売ったり、ハサミを入れたりして、今よりずっとサービスが良かったよ。これでおじさんの話は終わりだ。」

何かまだ聞きたいことがありそうだね。だが、ここが終点です。あとは、受け持ちの先生に聞いてちょうだい。毎度ご乗車ありがとうございました。」

【第9話オリジナル版 おわり】

## ～第9話「バスが通り始めた頃の話」を読んで～

長く折本町に住んでおられたご年配の方は、この話を読んで1953(昭和28)年にバスが開通した頃の懐かしい風景や生活状況を思い出されたことでしょうか。

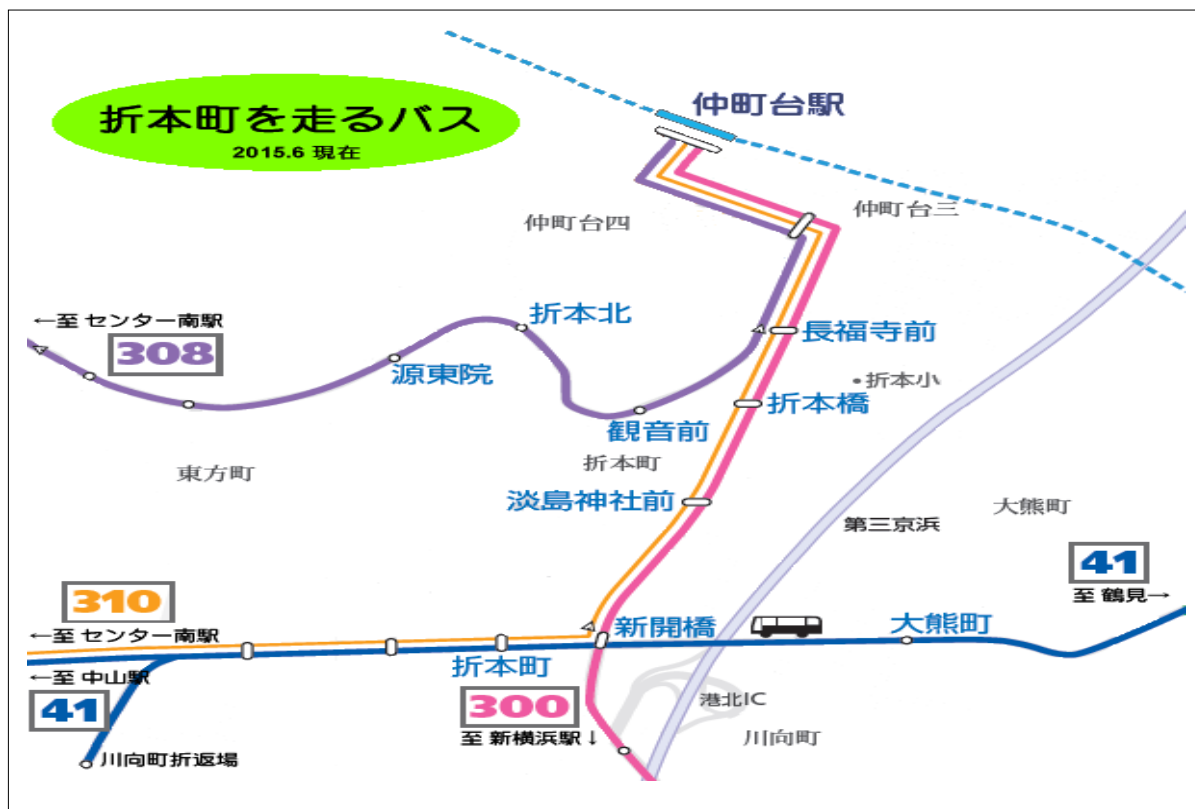
話の中に「鶴見川の堰のドンドン橋」がでてきますが、やや新しい世代に属する我々HP編集グループのメンバーは、このドンドン橋がどこにあったかを特定することができませんでした。ドンドン橋とその周辺の現在の状況を確認しておきたいので、もし当時の状況をご存じの方がおられましたら、是非正確な場所を教えてください。

(注) HP編集グループは後日、かつてドンドン橋があった場所を特定することができました。詳細は第10話をご覧ください。

さて、「わたしたちのまち」の第8話は鉄道、第9話はバス、第10話は自動車専用道と、いずれも地域の発展に密接な関わりがある交通の発展について掲載しています。

「わたしたちのまち」は30年前の資料ですが、交通事情の変化は、「わたしたちのまち」発刊後の30年間にも目覚ましいものがありました。

特に、『自家用車の普及』はその筆頭で、1975(昭和50)年頃までは生活に欠かせなかったバスを、補助的な交通手段に変えたと言えるのではないのでしょうか。このような車社会への変化は全国各地であったわけですが、折本町は第三京浜道路の港北インターに近いこともあって、きっとこの変化がより顕著であったことでしょう。



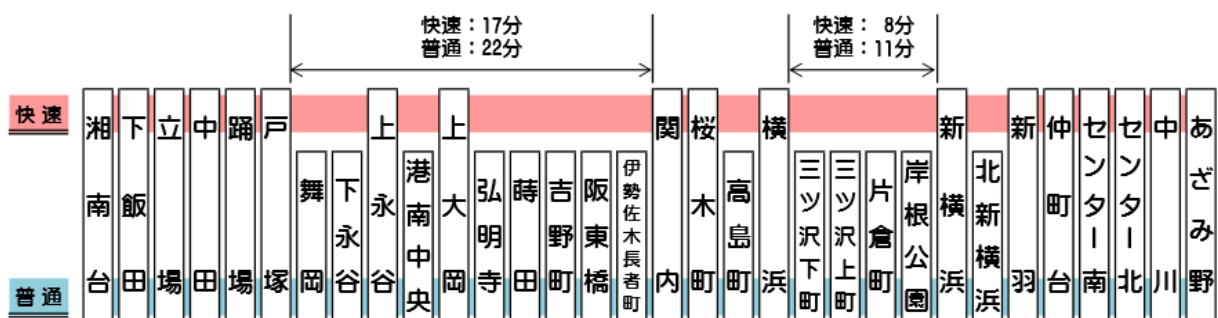
また、港北ニュータウンの造成と連携した『横浜市営地下鉄の開設』も、我々にとって特記すべき事項ですね。地下鉄は、横浜の中心地や東京の渋谷・品川へのアクセスを容易にし、それまではどちらかと言えば《のどかな田舎のイメージが強かった折本》を、《都会に隣接する豊かな田園地区》に変えた功労者の筆頭に挙げられるかもしれません。

ところで地下鉄と言え  
ば、2015(平成27)年7  
月18日に快速運転が開  
始されことになりました。

折本町民がよく利用す  
る「仲町台」「新羽」「新横  
浜」の各駅は、いずれも快  
速電車の停車駅になってお  
り、横浜の中心部へのアク  
セスが便利になりますね。  
期待しましょう。



横浜市営地下鉄・ブルーライン (www.asahi-net.or.jp より)



横浜市営地下鉄の快速運転：2015(平成27)年7月18日～

〔第9話を読んで おわり〕



## 《第10話 第三京浜道路の開通とまちの変化》

川向町にある第三京浜道路の港北インターチェンジは、いつもたくさんの自動車で混雑しています。折本町・大熊町・川向町の工場で作られた品物を運ぶにも、原料を運んでくるのにも第三京浜が多く使われています。1983(昭和58)年に新横浜元石川線が開通してからは、いっそう多くの自動車が利用するようになりました。

この第三京浜道路はいつ造られたのでしょうか。それは、今から20年前の1965(昭和40)年のことです。

第三京浜が出来るまでの折本・大熊・川向はどんな様子だったのでしょうか。その頃は今より家も少なく、沼地と田んぼと畑ばかりの寂しい町でした。

横浜方面に出かけるにも、田んぼのあぜ道を通り、鶴見川にかかっている丸木橋を渡って小机に出て横浜線を利用するか、川向まで歩いて、川和から来る横浜行のバスに乗るかでした。風の強い日など、川にかかっている丸木橋を渡るのは、とても怖かったそうです。

折本・大熊・川向はほとんどが農地で、鶴見川・大熊川の水は、かんがい用水として広く利用されていました。流れる水は清らかで川底が見え、堰を止めて水遊びや魚とりが行われ、夏の夜にはホタルが飛び交いました。

しかし、ちょっとした大雨でも洪水になり、1年に1、2回は水害が起き、人々を困らせました。その後、河川改修工事により草むらの土手がまっすぐなコンクリートの岸になり、第三京浜に続く周りの道を水害から守るようにもなりました。

第三京浜は、1962(昭和37)年1月27日から1965(昭和40)年12月18日まで、3年10ヵ月の年月をかけて完成しました。工事にかかった費用はその頃のお金で278億円もかかりました。今のお金になおせば、3千億円にもなります。

自動車が増え、前に作られた第一京浜国道、第二京浜国道ではさばききれなくなったので、第三京浜が計画されたのです。

第三京浜は全長が16.6km。東京の世田谷と横浜の三ツ沢を結び、途中で川崎インターチェンジと港北インターチェンジがあります。日本で初めての6車線の自動車専用道路で、中央分離帯の植樹は東名高速道路の植樹のテストを兼ねて行われたそうです。

第三京浜は自動車専用道路ですから、他の道路とは立体交差になっています。そのため全線のおよそ5分の2が橋になっています。

橋の部分の工事をするには、はじめに土の検査をして、それから地震などでも壊れないように柱の太さと基礎の大きさを決めます。さらに多くのテストをして設計図が作られます。だいたい柱の太さは1.5～3mです。



港北インターチェンジ

また山を削った部分も多くなります。折本貝塚橋のあたりも、もともと丘だったところを、ブルドーザー、ショベルカーなどで土を削って道路を造りました。折本貝塚橋のあたりは、大昔の人たちが食べて捨てた貝殻がたくさん残っていたところでしたが、それも削られてしまいました。

第三京浜が開通してから、町はどのように変わっていったのでしょうか。

今、折本町・大熊町・川向町にはたくさんの工場があります。崎陽軒・亀屋万年堂・日本オリベッティ・十辰製作所・ヤナセ、他にもまだあります。これらの工場はみんな第三京浜が開通してから後に出来た工場です。

みなさんの中で家が工場の人もありますが、ほとんどが第三京浜が出来た後に引っ越して来た人だと思います。

このように工場がどんどん増えていきました。住宅も増えました。特に緑産業道路のまわりに住宅が増えました。バスの本数も増えました。また第三京浜を使って、東京方面に新鮮な野菜を売ることが出来るようになったので、畑も増え、野菜作りが盛んになりました。

第三京浜の開通によって、町は大きく姿を変えてきたのです。

※工場が出来た年

亀屋万年堂……1969(昭和44)年  
十辰製作所……1970(昭和45)年  
崎陽軒……1975(昭和50)年

ヤナセ……1970(昭和45)年  
日本オリベッティ……1972(昭和47)年

【第10話オリジナル版 おわり】

## ～第10話「第三京浜道路の開通とまちの変化」を読んで～

第三京浜が作られた1965(昭和40)年以前の港北インターチェンジ付近は、今では想像もできないようなさみしい(だけど、のどかな)場所であったようですね。

この話に出てくる「鶴見川にかかっている丸木橋」は、第9話で紹介されたように、堰にかかっている「ドンドン橋」と言われていたそうで、HP編集グループのメンバーはこのドンドン橋があった場所に行ってきました。

この場所は、写真のように現在建設中の《横浜環状北線》のたもとにあり、洪水防止用の土手とサイクリングロードに挟まれた鶴見川の流れを一時止めているコンクリート製の堰があるところでした。

しかし、以前橋があったらしい面影は何も残っておらず、夏草が勢いよく生い茂っているだけでした。

50年の歳月がたった今、ドンドン橋の思い出は、きっと当時橋を利用していた人たちの記憶の中だけにしか残っていないのでしょうか。

さて、本シリーズでは、これまで交通事情の変化として、横浜線の開設、バス路線の拡充、地下鉄の開設について掲載してきましたが、この第三京浜道路の建設は、港北インターチェンジが近いこともあって、鉄道・バス以上に折本地区の発展に寄与したかもしれません。

折本町には、第10話で紹介されている会社に加え、近年では「家電のコジマ」「酒・食品のツカサ」「お菓子の亀屋万年堂」等の店舗だけでなく、「輸入家具のIKEA港北」「ホームセンターコーナン」「ジョーシン電機」「食品スーパーのロピア」「お菓子の横浜十番館」等の有名店も進出してきて、益々活気をおびてきたことはみなさんご承知のとおりです。



**建設中の横浜環状北線のたもとの  
「ドンドン橋」があった場所**



これらの会社・工場・店舗の進出は、折本および周辺地区での雇用も創出し、地域の経済の活性化もしてきました。

このような変化を背景に、折本町内の人々の生活や暮らし方も、以前の専業農家を中心とした構成からいわゆるサラリーマン世帯が大きく増加し、年齢的にも比較的若い世代が増加し、また、各家庭の女性も専業主婦中心から職業婦人・パート勤務者が増加して、大きく変わり続けてきたことでしょう。

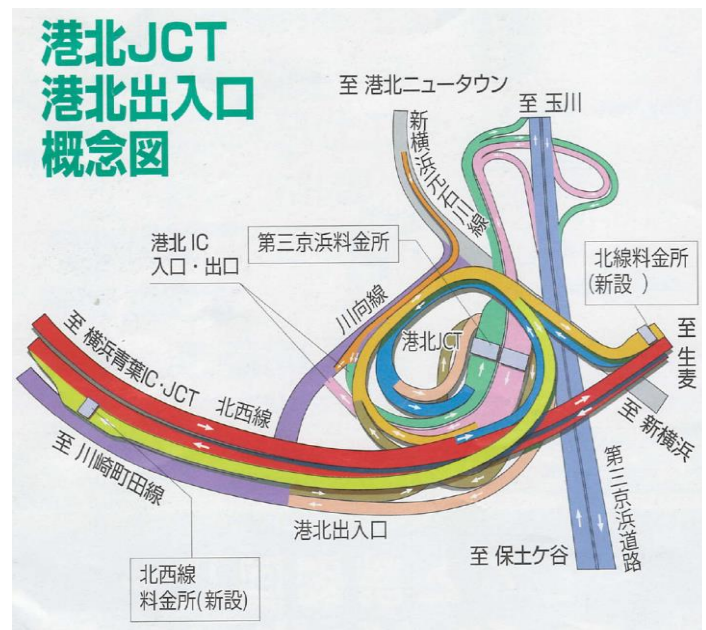
ところで、現在港北インターチェンジ付近では、「横浜環状線北線」と「横浜環状北西線」の建設工事が続いています。

「北線」は2016(平成28)年度内の完成、「北西線」は2021(平成33)年度内の完成が目標となっているようで、それぞれの線の開通後にはどんなに便利になるか、また、折本町を含む港北インターチェンジ周辺の町々がどのように発展・変化していくかとても楽しみです！

.....



**横浜環状線計画**



**将来の港北インターチェンジ  
(目がまわらないようにご注意ください！)**

**〔第10話を読んで おわり〕**

## 《第11話 昔の農業》

今の折本・大熊地区では、いろいろな野菜が作られ、車で横浜や川崎、そして東京の蒲田の市場へ出荷されていますが、昔の野菜作りはどうだったのでしょうか。

齊藤智司君のおじいさん、清司さん(大熊町)にお話を聞きました。



### 40年ほど前の折本ストアあたり

1937(昭和12)年頃は、ほうれん草・小

〔追記〕服装から見て1945(昭和20)年前後でしょうか？

松菜・トマト・キュウリ・カボチャ・スイカなどが春から夏にかけて作られ、秋には、大根・白菜・小カブが作られました。でも、玉ねぎとキャベツは作れませんでした。どうしてかという、この土地は、火山灰で土が軽く、玉ねぎやキャベツを育てるだけの力がなかったからです。

ここで作られた野菜は、牛車や馬車などで、片道3時間もかかって、横浜の中央市場へ運ばれます。市場が始まる朝の8時に間に合うように、朝4時頃に出かけました。市場では、少しでも値段のいいところを選んで売りました。

そして、帰りには、肥料としての人糞(人間の大便や小便)を大きな樽に入れて運んできました。今では、化学肥料などがあり、人糞はあまり使われなくなりましたが、その頃は最高の肥料で、人口の多い横浜から、わざわざ買ってきていました。売ってくれる家と契約して、月15銭で買っていました。

野菜を売る方法は、共同ではなく、個人で売っていました。道順は、折本町から新羽町の亀の甲橋を通り、小机から横浜へと行きました。

現在の亀の甲橋は、新しくなり、土手の上にかかっていますが、その頃は土手より下の方にあっただので、道路から下へおりて橋を渡り、また上へのぼって通りました。のぼりおりする時は、坂になるので、野菜や、樽の中の人糞がこぼれ落ちないようにするのが大変でした。

横浜まで3時間もかかるので、途中の六角橋で休んでいきました。そこには”めし屋”といって、食事や休憩をするところがたくさんあり、結構賑わっていました。

牛も馬も毎日、横浜まで通っていたので、道順を覚えてしまったのでしょう。次のような笑い話があるそうです。

市場へは、朝早く起きて行くので、帰る頃には眠くなり、車の上で、ついうとうとしてしまいました。しばらくして、車が止まったので目を覚ますと、ちゃんと自分の家に着いていたということです。牛や馬も利口ですね。



**昭和17年頃の子どもたち**

さて、戦争が終わって間もなくの1947(昭和22)年頃には、組合ができ、共同出荷になりました。1週間に3回、市場の方から自動車に来て、野菜を運んでいきました。

しかし、自由には野菜を売ることが出来ず、市場からは、運賃を取られ、大変な時期でした。

それから、また個人出荷に変わったのは、1965(昭和40)年頃です。

農家に耕運機が入り、農家の人たちも自動車の免許を取るようになりました。車で市場へ野菜を運ぶようになったので、牛車や馬車で運んでいた時と比べると、大変便利になりました。

野菜作りも、機械化されたので、とても楽になりました。でも一番気がかりなことは、連作をしているので、野菜に虫がついたり、病気になったりすることです。ですから、大事に育てた野菜が、虫もつかず、丈夫に育ったのを収穫する時が一番苦勞がむくわれるのだそうです。

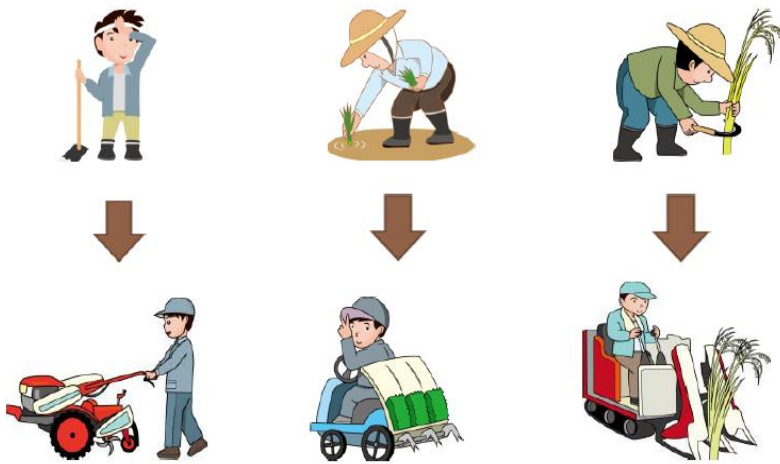
こうしてみると、野菜作りは、お父さんお母さんが、子どもを育てるのと同じように、大事に大事に作っていることがわかりますね。

**〔第11話オリジナル版 おわり〕**



## ～第11話「昔の農業」を読んで～

昔の農業がとても大変であったことが、この話を読んで理解できました。また、農業のやり方が、生産性の向上を目指してこれまで変化してきたことも知りました。



農業の移り変わり（手作業から機械化で）

農業のやり方を「耕作方法」「肥料」「出荷方法」に分けるとして、第11話では「肥料」について特に注目されているようでしたが、「耕作方法」も耕運機等の導入による機械化で、また、「出荷方法」も牛車・馬車から自動車の利用で大きく変わってきたことが書かれていました。

さて、注目の「肥料」ですが、先の大戦前〈1940(昭和15)年頃まで〉は、人糞を肥料として使用することで、いわゆる「循環型農業」が見事に実践されていたのですね。

そこで、HP編集グループでは人糞を使用した農業についていろいろ調べました。その結果、次のようなことが分かりました。

(1) 私たちが食べ物を食べた時、実は3割位しか栄養としては吸収されず、残りは人糞として排出されるらしい。…(これはいかにももったいない話ですね。)

(2) 我が国では多分江戸時代よりもずっと前から、人糞の肥料により他国に比べても高い農業生産性を実現していた。…(作物は生ではなく、加熱調理して食べることで衛生面の問題に対処していた。)



(3) 先の大戦直後〈1945(昭和20)年～〉に、日本を統治していたマッカーサー司令部により、不衛生で寄生虫がなくなるとの理由で、人糞から化学肥料への一大転換の指導が行われた。…(食生活の欧米化も急速に進みました。)

(4) 化学肥料は農薬の使用も相まって我が国の農薬の生産性を飛躍的に高めたが、一方で、食の安全性が強く叫ばれるようになった。…(安全性と生産性の向上の両立は、農業の究極の課題でしょうか。)

(5) 近年になり、下水処理機能が発達し、処理場で消毒され微生物も完全に処理するような方式になってきた。そして、下水処理場が増えれば増えるほど、どんどん環境負荷(環境に与えるマイナスの影響)が増大してきた。…(環境負荷の増大はこれから将来を考える上で極めて大きな問題となりました。)

(6) このような状況下で、環境負荷を減らしていくために、人糞を再び肥料として利用しようという動きが注目され始めている。ただ、家庭の排水から肥料を作っていくには、実は人糞に含まれる抗生物質や洗剤といった微生物に悪影響を及ぼすものの使用も控えなければならず、「循環型農業・循環型社会」を実現するためには社会全体のシステムを変えていく必要がある。…(いろいろ考えていくと、これはかなりの難題ですね。)

最後に、夢のある話をひとつ。

そんなに遠くない(?)将来に、人類が長期間の宇宙旅行をすることもあるでしょう。その際宇宙船には、生命維持のために必要な水や食料の「循環システム」が組み込まれていることが不可欠と言われています。宇宙船の循環システムに関わるノウハウは、我々の社会を循環型に変えていこうとする場合に、大いに参考になることでしょう。

我々が住んでいる地球は《巨大な宇宙船》にたとえられることがあります。この素晴らしい地球を我々の子孫に残していくためには、循環型社会への転換を真剣に考えていく必要があるのかもしれませんが。



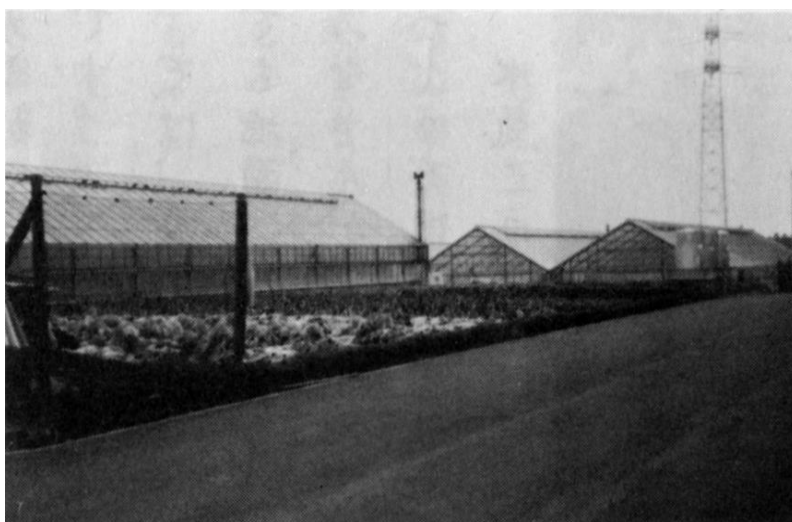
アポロ8号から見た《宇宙船地球号》

以上、折本の「昔の農業」から入って、とんでもなく大きな話になってしまいました。この第11話で古い時代の「ノスタルジックな思い出」を期待していた読者のみなさんには、話が過去と反対方向の未来に向かってしまって大変失礼しました。

〔第11話を読んで おわり〕

## 《第12話 港北ニュータウンの新しい農業》

みなさんの通っている折本小学校の周りは、畑や竹林があり、大変緑の多い所です。それでも、一面に田や畑があった頃に比べると、第三京浜や新横浜元石川が通り、工場や倉庫が建って、ずいぶん様子も変わってきました。特に学校の裏のニュータウンのあたりは、これからもどんどん変わっていくことでしょう。



水気耕栽培のハウス

港北ニュータウンの計画が立てられたのは、1965（昭和40）年ですが、その頃の横浜市は、田や畑にどんどん家が建てられていて、この辺の農家でも、農業ができなくなると心配する人がいました。でも、港北ニュータウンでは、自然や農業をもった町づくりがされることになり、農業のために、市からもたくさんのお金が出されることになりました。

そこで、市からのお金で、新しい農業を始める人たちがいました。これが水気耕栽培（すいきこうさいばい）です。

水気耕栽培は、1950（昭和25）年に日本に来ていたアメリカ軍が、日本の肥やしのかかった野菜は汚いからといって、作ったのが始まりです。

では、今までに比べて、どんなところが新しいのでしょうか。今までは、どんな作物でも地面に種をまいたり植えたりして育てました。ところが、水気耕栽培は、みなさんがクワッカスやヒヤシンスを育てる時の水栽培のようなもので、土は必要ではありません。そんなところが、今までにない新しい農業と言えるでしょう。

水気耕栽培の良いところは、土を使わないので、どのような土地でも栽培ができることです。また、普通の畑では、続けて作ることができない野菜でも、水気耕栽培なら、毎年続けて作ることができます。しかも、重油を使うので寒さに関係なく野菜が作れます。

折本では、主にトマトやキュウリを作っていますが、味も良いと評判です。畑の野菜に比べて味が良いのは、美味しく作れるように、肥料がうまく調整できるからで、畑ではこう上手くはいきません。





### 水気耕栽培のハウスの中

栽培層の水の中には、カリウム・石灰・窒素・マグネシウム・リンの他に、モリブデン、ホウ素、鉄が入っています。ずいぶんいろいろなものが入っていますが、おいしい野菜ができるための栄養になるのですよ。この肥料の入った水を、1時間に1回、空気と一緒に流します。この水は、地下のタンクから栽培層を通して、また地下のタンクに戻ってきますが、農家の人はおいしい野菜を作るために、いつも水や肥料に気をつけているそうです。

こんなふうに、大変素晴らしい栽培方法なので、一時は水気耕栽培を始める人もずいぶんいました。ところが、今農家の人はとても困っています。

寒い11月から4月の間、中の温度を上げるために使う重油が、とても高くお金がかかるからです。初めの頃1リットル10円だった重油が、今では1リットル70円もします。畳300枚位の広さの所では、冬の間の重油に、およそ200万円ぐらいものお金がかかってしまいます。

新しい農業として始められた水気耕栽培ですが、これからは重油が高いので大変だと、農家の人もこぼしていました。

では、新しい農業は、もう生まれないのでしょうか。そうでもないようです。

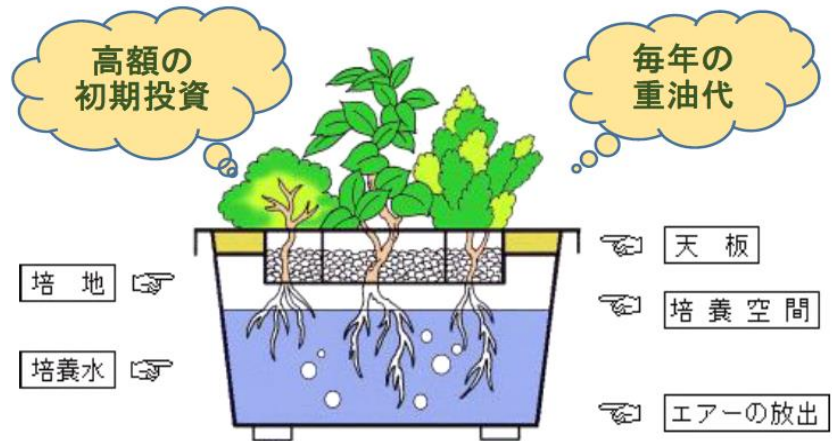
最近では、工業の人たちが、将来に向けて新しい農業を作り出そうとしています。例えば、レタスの葉を小さく切り取って、それを売っている形のレタスに育ててしまうコピー栽培というものを研究しているところもあります。またその他には、水気耕栽培のような方法なのですが、日がよく当たり、狭い所でもたくさん栽培できるように、タワーのような回転式の施設なども作られたりしています。

田や畑が倉庫や住宅地に姿を変えたり、お米を作らずにお店で買うようになってきたり、この辺の農家の様子も随分変わってきましたが、何年か先には、想像もつかないほど、新しい方法で野菜を作るようになっていくかもしれませんね。

### 【第12話オリジナル版 おわり】

## ～第12話「港北ニュータウンの新しい農業」を読んで～

この話では新しい農業として水気耕栽培等が紹介されていましたが、35周年誌が編纂された時期〈1985(昭和60)年〉から30年が経過した今みると、土や自然環境にこだわらない新しい栽培方法や技術を取り入れた農業形態への変化は、結局期待されたようには進まなかったと言えそうですね。



水気耕栽培（ため太郎シリーズ Q&A より引用）

おそらくは、水気耕栽培はコスト(初期の設備投資と毎年の費用とも)が高くて採算がとりにくく、その他の方法も技術革新がうまくいかなかったのでしょう。

現在は逆に、手間が大変で自然災害のリスクはあるものの、土や自然の恵みを利用した農法の良さが、コスト面でも環境保護や安全性の面でも見直されているのではないのでしょうか。

特に、自然の循環サイクルを考慮した「有機農法」は、家畜堆肥・稲わら・米ぬか・剪定樹木等を利用した有機堆肥を投入し、一番大変な雑草取りは除草農薬の使用を極力避けた手作業などを主としていく農法ですが、第11話でご紹介した「持続可能な循環型農業」と考え方が近いこともあって、近年はかなり定着してきているようですね。

有機農法に詳しく、実際に有機農法で小松菜・ほうれん草・ブロッコリー等を栽培しておられる町内のKさんに伺ったところ、この折本町でも1987(昭和62)年に「折本地区有機肥料生産利用組合」が発足し、さらに1992(平成4)年には「折本新鮮野菜出荷組合」が結成されて、現在は折本小や近隣の小学校に給食用材料を提供しているとのことでした。

また、〈新鮮で美味しく安心できる野菜〉と〈地産地消(地域で生産された農産物を、その地域で消費していく)〉を旗印にして横浜みなとみらいでのイベント朝市などにも積極的に参加しておられるそうです。

このように理解が広まりつつある有機農法ですが、湿気の多い季節が長期間にわたる我が国で有機農法をやっていくには、害虫・病原菌防除に即効性のある農薬使用を避けたり、肥料の出处管理・品質管理を厳格に行ったり、手間のかかる手作業での除草作業をしなければならないという大変さが実際はあるとのこと。

ところで、HP編集グループ員がKさんへのインタビューのために小松菜畑を訪れた日に、丁度、折本小学校から30人強の4年生が教育学習に来ていて、Kさんおよび農作業中のご家族の方に、土壌のこと、出荷先、袋への詰め方、作業の大変さ等、いろいろな質問をしていましたが、折本小学校の給食用に出荷している話が出たら、大変盛り上がっていました。



**緑豊かな小松菜畑**  
(奥の白いカバーは保温・防虫用の不織布)

きっと、農業と食材についての関心が高まったことでしょう。

.....

話を元に戻して、これからの日本の農業について考えてみると、いろいろな難題が横たわっているようですね。環境問題、食の安全性、価格競争、ひいては、農家の後継者問題等々……。

この中でも価格競争については、全ての分野でグローバル化が進行している状況で、大量で安価な外国製品との比較のもとで厳しい対応が求められていくことでしょう。

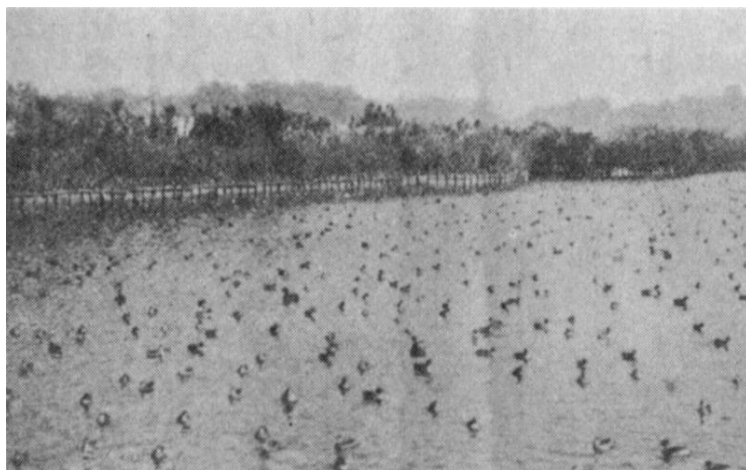
我々一般消費者もこれらを自分自身のこととして考えながら、これからの農業に注目していく必要がありますね。

**〔第12話を読んで おわり〕**



## 《第13話 鴨場のあった頃》

みなさんのお父さん、お母さんが、子どもの頃、川向には「鴨場」がありました。「鴨場」というのは、大きな池を掘って、鴨という鳥を集め、手網を使って鴨をとる広い場所のことです。今から20年ほど前まで、川向の石関さんのおじいさんたちが、この鴨場を開いて、お客を呼んでいたのです。



石関鴨場の「たまり」の一部

石関さんが川向に鴨場を作り始めたのは、1928(昭和3)年の事です。それまで鴨場があった羽田に飛行場が出来るというので、石関さん一家は、あたり一面水田ばかりの川向に移って来て、鴨場を作りました。池だけで約1万平方メートル、畳6千枚分の広さです。土地代と工事費を含めて、その頃のお金で14～5万円もかかったのですから、今のお金になおすと、14～5億円にもなります。

鴨場が出来上がると、この池に鴨を集めなくてはなりません。この頃の川向には、鴨は一羽もいませんでした。今の新横浜辺りには水辺があり、鴨がたくさんいたそうです。そこで石関さんは、夜中に新横浜の鴨がたくさんいる場所へ出かけて、石油缶をガンガン叩きました。驚いた鴨は飛び立って、近くの池に避難します。この避難した池が、石関さんの鴨場だったのです。鴨は渡り鳥ですから、秋から次の年の春までしか日本にいません。だんだん寒くなる10月から12月いっぱいまで毎晩、石関さんは石油缶を持って、鴨集めに出かけたそうです。

このような苦勞が実り、石関さんの池には鴨がたくさん集まるようになりました。多い時で約2万羽、池が鴨でビッシリ埋まったそうです。

石関さんが鴨場にお客様を呼び始めたのは、1930(昭和5)年からです。鴨場に來られるお客様は普通の人とは少し違います。天皇の親戚や大臣、貴族とよばれた人たちなど有名な人ばかりです。元海軍の山本五十六元帥も、よく石関さんの鴨場を訪れた一人です。

こういう人たちは、その頃とても珍しかった自動車を5、6台も連ねて、鶴見川の土手沿いの車がやっと通れるくらいの細い道を通って乗りつけてきました。大臣がお客で來られる時など、警察官が鴨場の周りを取り巻いて、ピストルを持った人が大臣につきっきりだったといえますから、その物々しさは大変だったことでしょう。



**鴨猟に出かける人**

お客様がいらっしやると、鴨猟の始まりです。石関さんたちは鴨猟をする3、4日も前から鴨に餌をやって鴨をよくならしておきます。そして本番。池の周りにある引き掘り(幅約1.5m)に餌を巻き、よくならしてあるアヒルを罠に使って、鴨をおびきこみます。引き掘りの両側にお客様が4人立って、パッと少し舞い立った鴨を手網で獲るのです。

鴨猟の後、お客様たちは鴨料理に舌づみをうちます。炭を入れた土器の上に鉄板を置き、その上で特別製のタレをつけた鴨の肉をネギと一緒に焼いて食べるのです。お客様たちは、鴨猟を楽しみ、食事を味わい、とった鴨をお土産に満足して帰られたようです。

やがて戦争が始まり、餌不足のため、鴨場は一時閉じられました。戦争が終わった後、アメリカ軍の人たちがお客様として見えられ、餌や材料を用意してくれたので再び鴨場を開くことが出来ました。

元総理大臣の池田勇人氏や佐藤栄作氏、大平正芳氏も戦争の後、お客様としてみえました。

戦争を挟んで長い間続いたこの鴨場も、いよいよ閉じなくてはならない日がやってきました。第三京浜道路の港北インターチェンジに、鴨場の一部がかかってしまったのです。1万3千平方メートルほどの土地が買い取られる事になり、鴨池も残せなくなりました。1961(昭和36)年3月を最後に鴨場は閉じられたのです。

やがて第三京浜が開通し、田んぼしか無かった石関さんの家の周りも工場がたくさん建設され、自然が少なくなってきました。今までやって来た鳥たちも、次第に姿を見せなくなったそうです。工場や車の騒音で、鳥の鳴き声もかき消されがちな今の川向に、かつて自然を利用した優雅な遊びの出来る鴨場があったなんて、本当に夢のようです。

**〔第13話オリジナル版 おわり〕**

## ～第13話「鴨場のあった頃」を読んで～

鴨猟の歴史について調べたところ、訓練した囀(おとり)のアヒルを使って鴨を細い水路に誘導し飛び立つ瞬間に網で捕獲する方法は、元々は徳川将軍家や有力大名が行っていた伝統猟で、明治時代以降は皇室と宮内庁が中心となって維持保存がなされているようです。

《石関鴨場》についてもっと知りたくなったHP編集グループ員は、川向町の石関さん宅を訪れ、鴨猟と鴨場に関する古い雑誌や新聞の切り抜き等の多くの資料を見せてもらい、いろんな話をお聞きしてきました。

《石関鴨場》は石関家先代の石関四良(しろう)さん[1907(明治40)年～1990(平成2)年]が作った“我が国で最後の民間人経営の鴨場”で、第13話で紹介されたように、往時は多くのお客さんで賑わったそうです。

鴨場が川向の地に作られたのは、近くに広がる田園地帯に多くの鴨が飛来していたことでもあります。かつての港北区(今の港北区・緑区・青葉区・都筑区)で最も土地が低い地域で、水を溜めて大きな池を作るのに便利だったからとのこと。

その証拠に、1965(昭和40)年頃までは、近くの江川や鶴見川の氾濫が頻繁にあり、鴨場が水浸しになったことが幾度となくあったそうです。…(今では想像するしかないのですが、昔は新横浜から川向あたりは広大な湿地帯だったのですね。)

石関さん宅の資料の中で最も興味深かったのは、1932(昭和7)年のアサヒグラフの「鴨の天国・地獄池」と題する特集記事の、背広姿の紳士と和服・日本髪のご婦人がそれぞれ数名ずつ引堀の両側で勇ましく手網をかまえている写真でした。



昭和7年アサヒグラフ特集「鴨の天国・地獄池」より

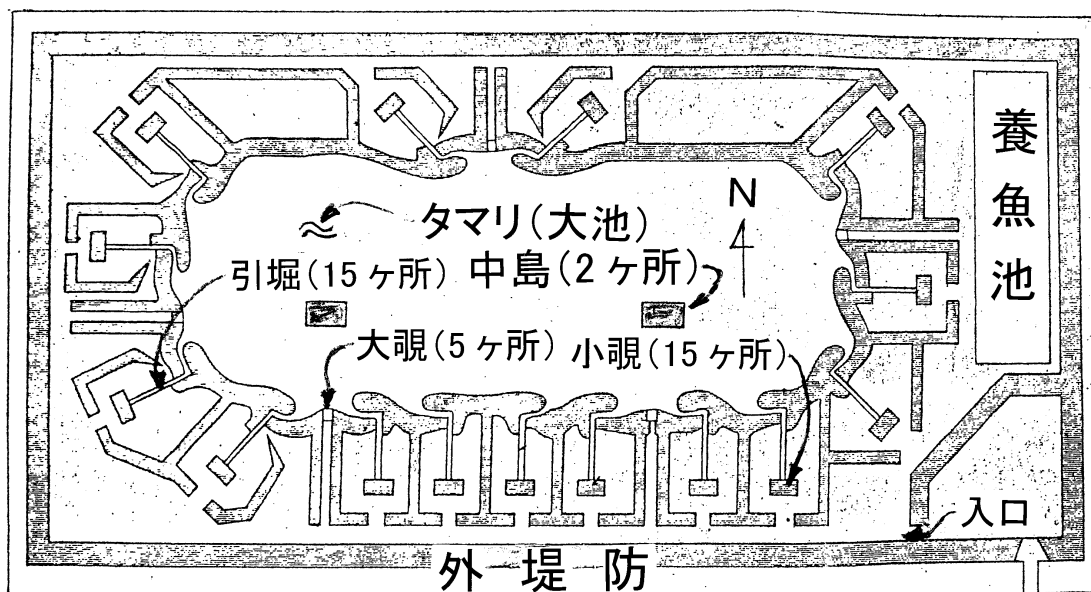
きっと当時でも珍しい遊びで、とても面白かったのでしょうね。



ところで、鴨は冬場に渡来する渡り鳥なので、鴨がいない夏場は稲を植えたり魚の養殖をしたりとご苦労もあったようです。しかし、池周辺の林は近所の子どもの格好の遊び場となっていて、クヌギの木も多くありカブトムシ採りなども盛んだったと石関さんも回想されておられました。

いろいろな歴史と思い出があった《石関鴨場》が1961(昭和36)年に閉じられた直接の理由は、第三京浜の開設に伴う用地買収とのことでした。当時を振り返ると、日本全体に国土改造や宅地開発の波が押し寄せ、また、環境変化も徐々に顕著になり、渡り鳥の飛来も減少してきた時代でもあったので、鴨場の閉鎖は、そのような大きな時代の流れを反映したものだったのでしょうか。

なお、石関さん宅には鴨の調理器具(特製の七輪や鉄板)が保管されていましたが、残念ながら鴨猟の施設設備(引堀や鴨の様子を見る視場)は残ってはいませんでした。しかし、引堀や視場は、石関鴨場にあったのとほぼ同じものが、今も東京都の「浜離宮恩賜庭園」にあるとのことで、ご興味がある方は是非行ってみてください。



**石関鴨場平面図 (東西284m、南北147m)**

《石関鴨場》にまつわる話は尽きませんが、石関家の方が詠(よ)まれた俳句をご紹介します。

(注) 鴨場創設者の石関四良さんの俳号は《櫟山荘孤遊(らくざんそう こゆう)》。「櫟」とは、カブトムシが好きな「クヌギの木」のこと。

水鳥(みずとり)を友とし沼に住み古(ふ)りぬ 孤遊

次に、石関四良さんのご長男の石関久幸さんの奥様の句集より・・・

暁闇(ぎょうあん)に声捉(とら)へたる戻り鴨 洋子

どちらの句も、「鴨」と「自然」を愛された石関家のみなさんのお気持ちがよく伝わってきますよね。

.....

最後に、鴨場があった場所とその周辺の様子の移り変わりを示す航空写真を紹介しましょう。(写真はいずれも国土地理院の国土変遷アーカイブ資料)



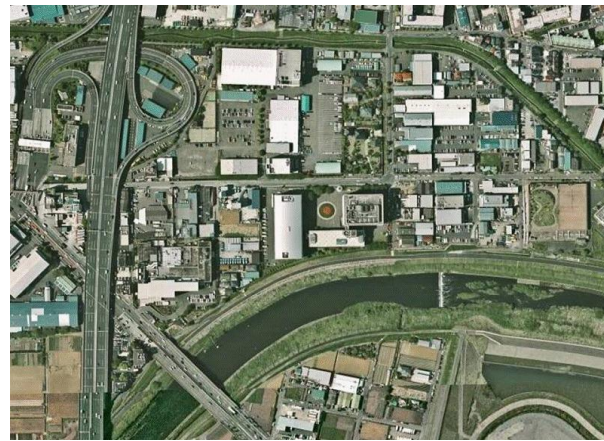
鴨場があった頃/周りは全て田畑のみ



鴨場の敷地に第三京浜が！(1965年)



第三京浜開通後は次第に田畑が減少/  
新横浜元石川線は未開通(1974年)



かつての鴨場の周辺には工場や建物が  
立ち並びほぼ現在の姿に(2004年)

〔第13話を読んで おわり〕

## 《第14話 鶴見川の洪水》

鶴見川は、東京都の町田市の方から流れはじめて、とちゅう恩田川、早湊川、矢上川などを集めながら、鶴見区から東京湾に流れ出ています。川幅は広くありませんが、曲がりくねってゆったりした流れの川です。

この川は、昔から雨が降ると水かさが増えて、水が溢れたり、土手が切れたりして大洪水になりました。特に鶴見川に近い、大熊町や川向町では、雨が少し多く降ると、洪水になり人々は大変困ったそうです。

洪水になると、田や畑の作物は、泥水をかぶったり、流されたりして、まったくとれない年もありました。また、泥水が川のように家の中に流れ込み、農家では使う道具や飼っている牛や豚、鶏などが水浸しになり、畳や家具まで使えなくなっていました。

こんな洪水が毎年のようにあり、せつかく作った米や野菜が腐ってしまって、農家では随分困りました。米の場合、豊作だと千平方メートルあたり6俵ぐらいとれますが、これは5、6年に1度ぐらいで、ひどい時は2俵しかとれない年もあったようです。

こんな不作の年が100年間に10回以上にのぼり、人々は恐ろしい洪水に長い間苦しめられてきました。

20年ほど前の1966(昭和41)年にも台風4号にともなう洪水がありました。その時の様子を川向町に住んでいた人が、次のように話してくださいました。

.....

「6月28日に関東地方の南の海上にやってきた台風は、雨台風で鶴見川の近くでも、27日の夜から強い雨が降り始め、28日の夕方までに近頃はない大雨になってしまったんですよ。



川向町/1966(昭和41)年6月

このため鶴見川の方々に、堤防が壊れ、水が田畑にあふれたかと思うと家の方にも押し寄せてきました。畳の上まで水につかった家や、床の下まで水が入った家は、川の近くのまちまちで18,600戸にもなったそうです。



その頃、川向は工場が一つとわしの家が1軒あっただけで、まわりは田んぼでした。今の犬熊十字路辺りまであたり一面海の様でしたよ。

しかし、まさか二階まで水が上がってこないだろうと思って、荷物などを二階に上げ、様子を見ていたんです。すると、みるみるうちに水が二階まで上がって来たんです。急いで屋根の上に登って避難しました。それはもう恐ろしかったですよ。それから、備えてあった木のボートに乗って、今の産業道路の山側の方まで逃げて、犬熊保育園まで避難し、一夜を明かしました。犬熊保育園では、町内会の人たちが炊き出しをしてくださったり、市からは毛布などが配られたりしたんですよ。」

.....

また、そのころ工場をやっていた人が、

「私の工場では、機械や鉄板が水に浸かったため、全部錆びてしまい、ヘドロがいっぱいついていて使い物にならなくなって、大変困りました。毎年、大雨や台風の季節になると、水が出るかなと不安でたまりません。」

「こんな大雨の時は、消防団の人や男の人たちは、土手に出て、雨の様子や水の上がる様子を見ながら気をつけていました。また、堤防が切れないう、土嚢といって、土をつめた袋を土手に並べたりしました。今でも、この土嚢が少し残っているのが見られます。」

と話してくださいました。

.....

今では、鶴見川の堤防を強くする工事が進み、堰も広がって、水の流れがよくなりました。そして、家々では、土を高く盛って、水が家の中まで入らないようにしています。しかし、まだ、江川という小さな川の周りは、土地が低く、工事が遅れているため、時々、床下ぐらいまで水が上がってきたり、交通止めになることもあるようです。特にニューライフマンションから陽光ハイツのあたりは、大人の腰ぐらいまで水が出たことがありました。早く水が出ないよう工事を進め、水の心配をしない安心した生活が出来るといいですね。

**〔第14話オリジナル版 おわり〕**

## ～第14話「鶴見川の洪水」を読んで～

2015(平成27)年9月の台風18号による鬼怒川流域の洪水の被害は、みなさんも記憶に新しいことでしょう。近くを流れている鶴見川についてもっと知りたくなったHP編集グループ員は、日産スタジアムの近くにある「鶴見川流域センター」に行って鶴見川の洪水の歴史や治水対策について調べてきました。

鶴見川の全長は 42.5kmで、鶴見川の流域は下図の地域です。全国的に見るとそんなに長くない鶴見川が、頻りに氾濫する《暴れ川》と呼ばれるようになったのは、この地域のほとんどが山岳地帯や森林地帯ではなく丘陵地帯や台地で占められ、その間を文字通り「蛇行」しながら流れているからです。

鶴見川はずっと昔から、雨の降らない時期の水量は乏しいが、多量の雨が降るとすぐに洪水が発生するような川であったようです。

そして、近年のこの地域の都市化・過密化が、流域の保水能力を大幅に減少させ、洪水の被害を一層大きくしてきました。

河川としては大きくない鶴見川の水系が、〈国土保全上または国民経済上特に重要な水系である一級水系〉に指定されているのはこのような理由によるものです。



(国交省 京浜河川事務所の「記者発表資料」より)

急激な都市化が進んだ昭和30年代以降の鶴見川の大規模な洪水を、「鶴見川流域センター」の資料から紹介しましょう。

- ・昭和33年9月：台風22号(狩野川台風)による洪水、床上床下浸水20,000戸以上
- ・昭和41年6月：台風4号による洪水、床上床下浸水18,600戸…(第14話で紹介)
- ・昭和51年9月：台風17号による洪水、床上床下浸水3,940戸
- ・昭和57年9月：台風18号による洪水、床上床下浸水2,710戸



**1958(昭和33年)狩野川台風による鶴見区の被害状況(神奈川新聞社撮影)**

ここでみなさん、年の経過と共にだんだん被害が小さくなってきていることにお気付きですか？

これは鶴見川流域の《総合治水対策》が始まったからです。《総合治水対策》とは、洪水を発生させないために、次の①～④を順次国と地域が一体となって行っ

ていく総合的な対策です。

- ① 地域の緑化を主とした自然による保水および遊水機能の保全
- ② 下水道・雨水マス等による急激な雨水流出を抑制する設備の充実
- ③ 堤防工事や河道掘削による河道整備
- ④ 洪水調整用遊水地の設置

このうち、鶴見川の治水対策で最も特徴的なものは、④の「洪水調整用遊水地」の規模が極めて大きいことです。

日産スタジアムとその周辺の広大な「鶴見川多目的遊水地」がこれに相当する施設であ



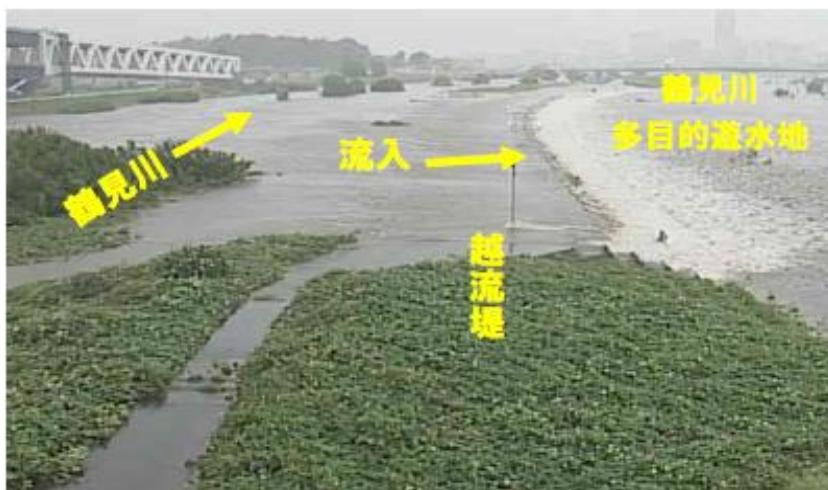
**鶴見川多目的遊水地配置図**

(国交省京浜河川事務所の「記者発表資料」より)



ることはみなさん勿論ご存知ですよ！

「鶴見川多目的遊水地」は総貯水容量390万 $\text{m}^3$ の巨大な施設で、平成15年に供用を開始して以来、これまでに15回以上(年1回以上)の洪水調節を行ってきました。



多目的遊水地への流入状況/2014年10月6日  
(国交省 京浜河川事務所の「記者発表資料」より)

このような実績の中で、「2014(平成26)年10月の台風18号」による豪雨の量は、第14話で紹介されている「昭和41年の台風4号」の時よりも多かったのですが、「鶴見川多目的遊水地」があったために、流域の洪水被害はほとんど発生しなかったそうです。



平常時の鶴見川多目的遊水地  
(国交省京浜河川事務所「記者発表資料」より)



洪水調節時の状況/2014年10月6日  
(国交省京浜河川事務所の「記者発表資料」より)

ところで、「鶴見川流域センター」には流域に生息する淡水魚や小動物も展示されていました。

これまでは災害にのみ焦点をあててきましたが、本来川は農業に必要な水を供給し、多くの生き物を育むことで流域を豊かにしているので、私たちに身近な大熊川や江川を含む鶴見川水系に感謝しながらこの読後話を終わりたいと思います

〔第14話を読んで おわり〕

## 《第15話 最初の折本小学校(明治時代)》

### 1. 明治より前の学校

今から120～130年以上も昔の江戸時代には、男の人は頭にちょんまげを結び、侍は、腰に刀をさしていました。明治時代より前を江戸時代といいます。

この頃は「学校」というものはありませんでした。その代わりに、子どもたちは「寺子屋」といって、お寺などで勉強をしました。

「寺子屋」では、6才から12～13才ぐらいの子どもが、お坊さんや近くに住む知識のある人から「読み・書き・そろばん」といって、字の読み方や書き方、そろばんでの計算の仕方を習っていました。

机は、今の学校のようなものではなく、子どもたちは床に正座をして、勉強をしました。えんぴつ、消しゴムなどは無く、字を書く時は筆を使っていました。だから、毎日が習字の時間のようでした。



寺子屋の様子

寺子屋では月謝を払わなくてはならなかったもので、家が貧しい子は寺子屋にも行けませんでした。ですから、大人になっても字を書けずに自分の名前さえうまく書けないような人がたくさんいたということです。

### 2. 明治になってからの学校

明治になって、日本は外国と行き来をするようになりました。そして、外国の進んだ技術や文化がどんどん日本に入ってきました。政府は、日本も外国のように文化の進んだ国にしようと考えました。そのためには子どもたちをしっかりと教育しなければならないと考えて全国に学校を作ることにしました。

1872(明治5)年に「学制」が出されて、全国に学校が作られ始めました。しかし、すぐに新しい校舎が作られたわけではありません。寺子屋がそのまま小学校になり、教室はお寺を借りるという所がほとんどでした。



今の折本町の近くでは、真照寺(しんしょうじ)が学校として使われました。真照寺の学校は折本町と東方町に住む子どもたちが通っていました。川向町の子どもたちは長昌寺(ちょうしょうじ)というお寺を使い、大熊町の子どもたちは新羽町の子どもたちと、一緒に勉強していました。

その後、1877(明治10)年になって、東方町の表根(おもてね)というところに新しい校舎ができ、折本小学校と名前がつけられました。

この折本小学校には、東方・折本・川向・大熊の四つの地区の子どもたちが通うことになりました。今の折本小学校と都田小学校の学区を合わせた地区です。



**小学生の通学姿**

学校ができた頃は、今と違って、月謝を払わなければならなかったので、家が貧しく学校にもいけない子がたくさんいました。初めの頃は、100人もいなかった子どもたちも、1900(明治33)年には、870人にも増えました。

小学校には6才から10才までの下等小学校と11才から14才ぐらいまでの上等小学校にわかれていましたが、ほとんどの子どもは下等小学校の4年間だけしか行きませんでした。

1881(明治14)年になると初等科3年・中等科3年・高等科2年の合計8年間学校に行くことになりました。

1886(明治19)年には尋常小学校4年・高等小学校4年となり、尋常科は、義務教育といって、どの子もみんな学校に入って勉強しなければならないことになりました。

子どもたちは着物を着て、ちゃんちゃんこのようなものをはおって学校に行きました。カバンなどを持っている子はなく、みんな風呂敷で勉強の道具を包んで持って行きました。履物は、藁で作った「わらぞうり」でした。中には、裸足のまま学校に来る子もいたそうです。鉛筆やノートなどを持っている子は、ほとんどなく、みんな筆を使って紙が真っ黒になるまで字の練習をしました。

## **〔第15話オリジナル版 おわり〕**



## ～第15話「最初の折本小学校(明治時代)」を読んで～

言うまでもなく幼少時の教育は、人格を形成し、生活能力を向上し、社会性を身に付けていくために極めて重要です。中でも、「読み・書き・そろばん」と言われ、物事を正しく理解し、自分の考えを表わし、論理的に思考を展開していく能力を向上させることは幼少時の教育の基本でありましょう。

江戸時代に全国で「読み・書き・そろばん」を教えていた《寺子屋》の正確な数は定かではありませんが、多分50,000校以上あったのではないかとされています。多くは今の小規模な学習塾のようなものだったのでしょうか、2007(平成19)年時点での全国の小学校数が約22,700校であったのと比較すれば、当時の寺子屋の数の多さは驚くばかりです。

このように寺子屋で多くの子どもたちが教育の基本を学んでいくことで、当時の庶民の知的レベルは大いに向上していたことと思います。

ちなみに、当時の《識字率(文字の読み書きができる人の割合)》について調べたところ、次のような記述がありました。

〈日本の識字率は、数百年に亘って世界一を誇る。江戸時代の幕末期においては、武士はほぼ100%読み書きができたという。庶民層でも男子で49～54%は読み書きができた。同時代のイギリスでは下層庶民の場合、ロンドンでも字が読める子どもは10%に満たなかった。〉…『奇跡の日本史』(歴史の謎研究会編)

また、多くの外国人が日本人の識字率の高さに驚嘆し記録を残しています。例えば、

〈1853(嘉永3)年に黒船を率いてアメリカからやって来たペリー提督は、日記(『日本遠征記』)に日本について「読み書きが普及していて、見聞を得ることに熱心である」と記している。ペリーは日本の田舎にまでも本屋があることや、日本人の本好きと識字率の高さに驚いた。〉…『日本絶賛語録』(村岡正明著)

しかし、第15話には経済的な理由で寺子屋に行けない子どもたちが多くいたことも書かれていました。子どもの教育にお金がかかるという親の悩みは、いつの時代も同じでしょうか。

明治維新後の日本の教育は、次表のように推し進められてきたようですが、徐々に実施されてきた《就学期間》の延長と、1907(明治40)年に導入された《義務教育》の無償化は、きっと多くの国民に歓迎された画期的な制度改革だったことでしょう。

年代と法制度	就学期間	義務規定	無償
1872(明5) 学制	定めなし	定めなし	×
1879(明12) 教育令	少なくとも 16ヶ月	父母・後見人が児童を就学させる 責任	×
1880(明13) 教育令 (第二次)	少なくとも3年	父母・後見人が児童を就学させる 責任	×
1886(明19) 小学校令	尋常小学校 4年	父母・後見人が児童に普通教育を 得させる義務	×
1907(明40) 小学校令 (改正)	尋常小学校 6年	父母・後見人が児童を就学させる 義務	○
1941(昭16) 国民学校 (戦時)	初等科6年 高等科2年	保護者が児童を就学させる義務	○
1948(昭23) 学校教育法	小学校6年 中学校3年	保護者が子女を就学させる義務	○

### 日本の義務教育規定の変遷(www.asahi-net より引用)

さて、折本の地に目を向けると、明治初期には第6話でも紹介された「真照寺」が小学校として使われていて、1877(明治10)年になって初めて「折本小学校」が登場します。

折本小学校は、その後今の「西原公園」に移動し、さらに、1975(昭和50)年には現在の地に移動することになりますが、その移り変わりの話は第16話以降に譲り、ここでは触れないでおきましょう。

ただ、最初の「折本小学校」があった場所を実際に確認したくて、東方町の表根のHさんにお聞きしたところ、今は雑木林に囲まれてわずかに民家があるHさん宅の裏手に昔折本小学校があったとのことでした。現地は大熊-折本-東方と続く丘陵地帯の裾野にあり、鬱蒼とした木々に目を奪われたせいもありますが、多くの子どもたちがいた小学校がそこにあったとは本当に想像もできませんでした。

年月の経過は、人の営みを変え、風景をも変えていくことで、かつての出来事や思い出も遠い昔に追いやって、いずれは人々の記憶から無くしてしまうのでしょうか！

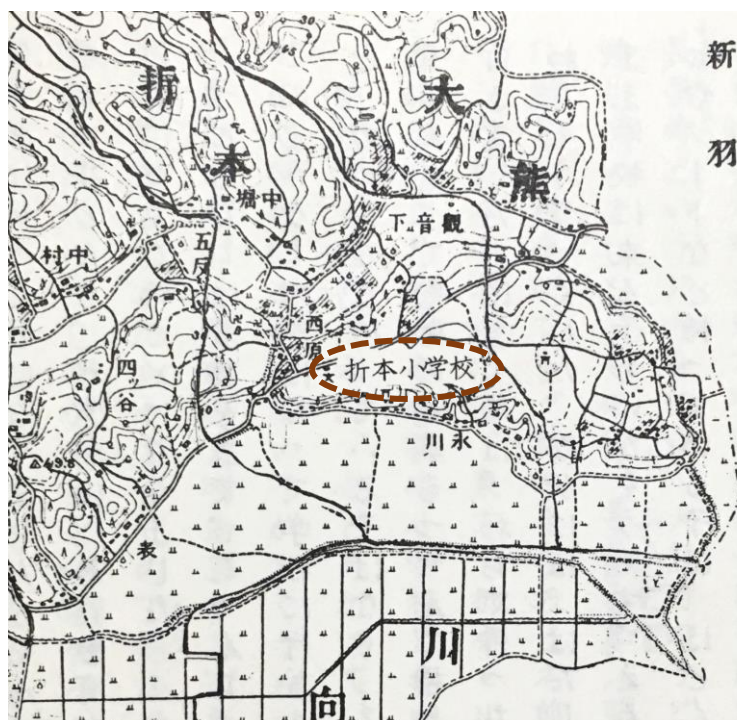
**【第15話を読んで おわり】**

## 《第16話 おじいさんが通った頃の学校(大正時代)》

大正時代の初めの頃の折本小学校は、東方町のバス停の山際にはありました。五年生までの人は、ここに通っていましたが、この地域には6年生以上の人が通う高等小学校がなかったので、中川小学校まで通っていたそうです。

そこで、この地域にも高等小学校をつくろうという願いが強くなり、1916(大正5)年、都田尋常高等小学校がつけられました。そのため、折本小学校は、都田小学校の分校となり、今の西原公園に移り第二分教場と呼ばれるようになりました。

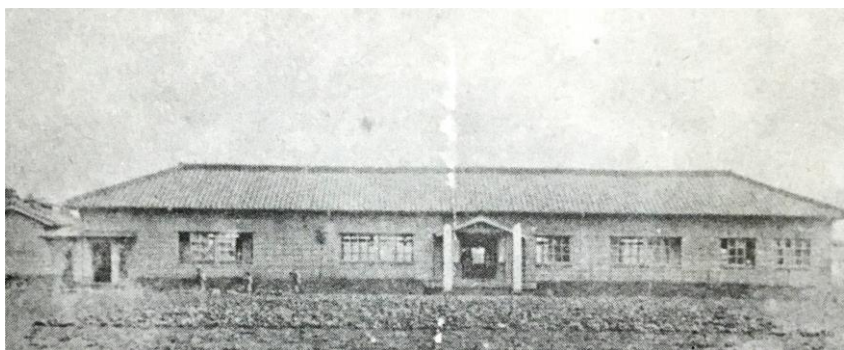
1年生から4年生までがここで勉強し、5年生以上は、都田の本校に通っていましたが、運動会や学芸会などの特別な行事の時は、分教場の子どもたちも本校に集まりました。



大正の頃のこの地域の地図

この頃の校舎は、木造の平屋建てで3教室と女子が裁縫をする畳の部屋ぐらいしかなかったそうです。児童の人数も35人ぐらいしかいなかったのも、先生も1・2年生に1人、3・4年生に1人しかいませんでした。

学習科目は、修身・国語・算術・図画・唱歌・体操がありました。「学校手帳」というものがあって、教科(学習)、操行(日常生活の様子)が記入され、成績は、甲(よい)・乙(ふつ)・丙(わるい)の三段階で表されていました。



1916(大正6)年頃の校舎全景

授業の始まりの合図は鐘をならします。学用品は少なく、特に低学年は石版に石筆(ろう石)を使って書きました。



中学年になると、今のように質のよいノートは無いので、ざらざらした「わらばん」というものを使っていました。木の筆箱には、鉛筆が2本ぐらいしか入ってなく、消しゴムも持っている人は少なかったようです。また、机や椅子は、二人がけのものを使っていました。

その頃の子どもたちは、陣取り・騎馬合戦・木の枝を使った棒倒しや石蹴り、フナ釣りやシジミ採りなどで遊んでいたそうです。夏は鶴見川で泳いだりもしたようです。また、子守や風呂焚きなど家の手伝いもたくさんしていました。

子どもの服装は、男子は木綿カスリの筒袖(つつそで:普通の着物と違い、脇が開かずに袖が短い)、女子は元禄(げんろく:筒袖より少し袖が長い)の着物を着て、自分の家で編んだ藁草履を履き、風呂敷に本やお弁当を包み、肩からしょって登校しました。



**桜の木がたくさんあった校庭**

また、この頃折本の分教場には、音楽の教育に力を入れていた男の先生がいました。

1923(大正12)年頃3・4年生だった今70歳ぐらいになるおじいさんやおばあさんたちは、その先生の教えで、ハーモニカ・シロホン・タンブリン・トライアングルを使

った合奏を楽しんだという事です。本校に通うようになってからも分教場での練習が続きました。

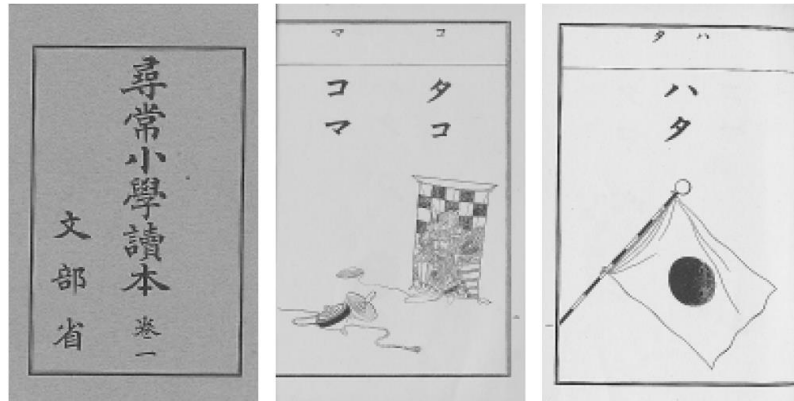
そして、6年生になった1925(大正14)年、NHKラジオから、出演を申し込まれ、その年の12月25日に演奏が放送されました。「カルメン」や「金婚式」などの演奏は、とてもすばらしかったそうです。そのラジオ放送を聞いた人たちから招かれて、川崎や横須賀の方まで演奏に出かけました。それからしばらくは、このハーモニカ・バンドの練習は、続けられたそうです。

**【第16話オリジナル版 おわり】**

～第16話「おじいさんが通った頃の学校(大正時代)」を読んで～

1877(明治10)年に東方町バス停付近に初めて登場した「折本小学校」は、その後1916(大正5)年に今の西原公園に移り、1975(昭和50)年に現在の地に落ち着くまで、約60年間にわたり地域の子どもたちに教育の場を提供してきた経緯がよく分かりました。

昭和50年と言えばそんなに昔ではないので、以前より折本町に住んでおられる50歳代より年配の方は、西原公園にあった「折本小学校」に通われたのですね。

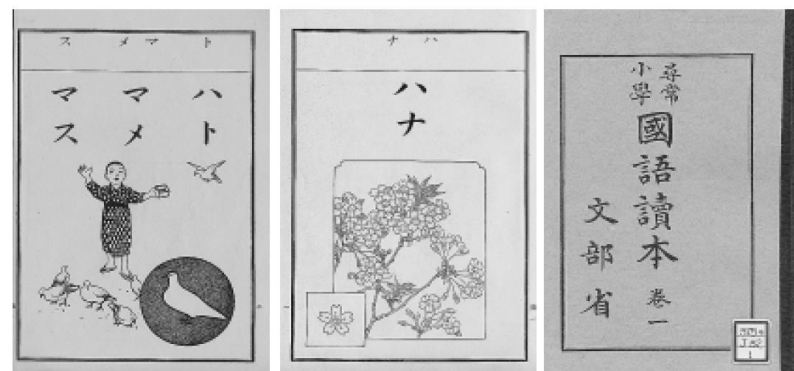


1910(明治43)年～1917(大正6)年の「尋常小学読本」

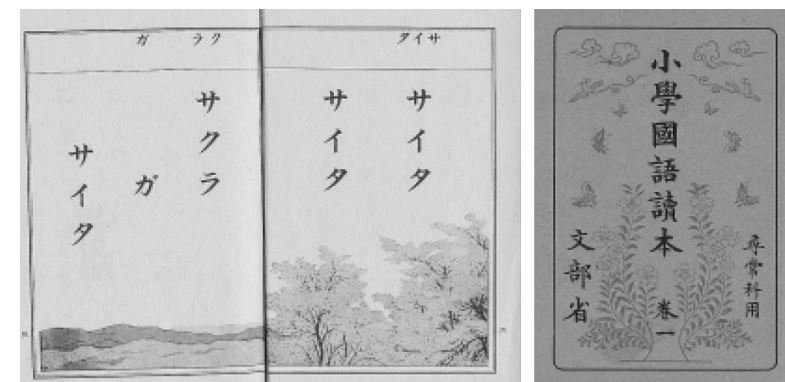
第16話には、大正から昭和初期にかけての小学校における学習教育や子どもたちの活動の様子が書かれていました。

学習科目は今とほぼ同じようですが、修身(今の「道徳」)が最初に紹介されているところは、教育の基本が人格形成だと考えられていたようで興味深いです。

今の「あゆみ」は「学習手帳」と味気ない呼ばれ方でしたが、これを受け取る時のワクワク・ドキドキ感は、いつも変わらないでしょう。



1918(大正7)年～1932(昭和7)年の「尋常小学国語読本」



1933(昭和8)年～1940(昭和15)年の「小学国語読本」

また、服装や学用品はとても質素でしたが、遊びになると、今の子どもたちよりはるかに元気で勇ましかったようですね。

この第16話の最後の部分に出てくる《音楽の教育に力を入れていた男の先生》が、第6話で紹介した雲井麟静さんであることは、皆さんお気づきのことと思います。雲井先生は折本地区の子どもたちに対する情操教育の大恩人です。



**NHK ラジオに出演して満面の笑顔の生徒たち！**

**(雲井耀一さん提供)**

関東大震災が発生したのが1923(大正12)年9月で、2年後の1925(大正14)年の3月にNHKラジオ放送が始まり、その年の12月に折本の6年生が出演したことになります。当時は震災復興真っ只中の時期でしたが、折本の皆さん方は、しばし世間の喧騒を忘れて、ラジオから流れる子どもたちの音楽に耳を傾けたことでしょう。

さて、大正から昭和に入ると、「満州事変：1931(昭和6)年～」「日華事変：1937(昭和12)年～」そして「太平洋戦争：1941(昭和16)年～」と、我が国全体が慌ただしくなります。このような時代の小学校教科書に掲載されていた《晴れ間》という詩を最後にご紹介します。世の中は不穏でも、日本のどこにでも(もちろん折本にも)あった「豊かな自然」と「のどかな田園風景」を歌った心が洗われるような詩です。

.....

《晴れ間》 作者：不詳

さみだれの晴れ間うれしく、野に立てば 野は輝きて、  
白雲を通す日影に、はや夏の暑さをおぼゆ。  
行く水は少し濁れど、せせらぎの 音もまさりて、  
よろこびを歌うが如く、行く我を迎ふる如し。  
田園のつづく限りは、植えわたす 早苗(さなえ)のみどり。  
山遠く 心はるばる。天地(あめつち)の大いなるかな。  
ふと見れば、道のほとりに つつましき姿を見せて、  
濃き瑠璃(るり)の 色あざやかに、咲くものは露草の花。



**[第16話を読んで おわり]**



## 《第17話 戦争中の学校》

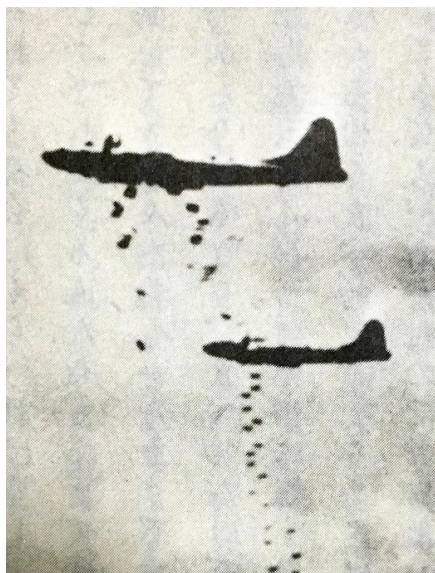
淡島神社に「慰霊碑」とかかれた石碑があります。それには戦争で死んだ人の名前が刻まれています。真照寺や長福寺にも戦争で死んだ人のお墓があります。戦争の頃には、どんなことがあったのでしょうか。

1941(昭和16)年、日本はアメリカ・イギリスなどの国と戦争を始めました。それまで中国とも10年余り戦争をしていました。

1944(昭和19)年から戦争が終わる1945(昭和20)年まで、アメリカのB29爆撃機が日本中の町を空襲して、横浜の中心も焼け野原になってしまいました。大倉山(今の大倉山公園)には高射砲の陣地がありました。だから、そこを狙ってたくさんの爆弾が落とされました。折本・大熊にも焼夷弾が落とされました。



淡島神社にある慰霊碑



爆弾を落とすB29爆撃機

学校で勉強中に空襲警報が鳴ると、子どもたちは集団下校をしました。毎日のように空襲があったそうです。空中戦の様子が見え、アメリカの戦闘機が川向の鶴見川に落ちたこともあったそうです。

その頃小学生だった斉藤英雄さんは、「本当に空襲がひどくなってからは学校(都田の本校)に行かなかった。艦載機に機銃掃射されたこともある。体の脇を機関銃の弾が通っていった。女の子はすくんで泣き出してしまった。」と話してくれました。

また森田忠明さんは、「家の玄関の前で、弟のおしめを替えていたら、グラマンが急に山の陰から出てきて、機関銃を撃ってきた。あわてて家の中へ飛び込んだ。」と、その頃の様子を話してくれました。

それでも都会に比べれば空襲がひどくない折本・大熊に、親戚などを頼って引っ越ししてくる人たちも増えてきました。これを「疎開(そかい)」といいます。遠い沖縄から疎開してきた人たちもいたそうです。

物が足りなくなり、食べ物だけではなく、靴やゴムまりまで自由には買えず、配給になりました。鉛筆は本当に短くなるまで使いました。折本・大熊はお米や野菜を作っているので食べ物に困ることはそれほどなかったようですが、親戚の人などが疎開してきて人が増えたので、お米の弁当の代わりにサツマイモを持って行かなければならないこともあったそうです。



当時のラジオ体操<1939(昭和14)年 大熊宮で>

学校も兵舎になり、兵隊が寝泊まりするようになりました。職員室だけを残して学校は使えなくなったので、子どもたちは淡島神社や大熊神社の神楽殿で勉強をしました。

今は残っていませんが、折本町の「荷扱所」(野菜の集荷所)まで教室の代わりに使いました。子どもたちは「さんだわら(米俵の蓋)」を持って通いました。椅子が無いので、「さんだわら」を敷いて座ったのです。

それでも教室が足りないので、外で勉強する子と、室内で勉強する子と交代だったそうです。大熊神社では木の枝に黒板を下げて勉強したのです。

学校では先生は厳しく、特に《天皇陛下》と言われる時は直立不動の姿勢をとらないと、きつく怒られました。その頃天皇は神様だと教えられていたのです。

1945(昭和20)年8月15日に、日本が負けて戦争が終わりました。戦争が終わると、学校も元のように始まりましたが、教科書もありませんでした。謄写版で印刷した薄い本を教科書の代わりに使いました。ミルクの給食が始まりましたが、子どもたちが交代で本校の都田小学校まで取りに行かなくてはならなかったのです。今では考えられない事ですね。

〔第17オリジナル版 おわり〕



## ～第17話「戦争中の学校」を読んで～

この話には、先の太平洋戦争〔1941(昭和16)年12月8日～1945(昭和20)年8月15日〕で日本軍の兵士として命を落とされた方を祀る「慰霊碑」、圧倒的な米軍による「空襲」、都会から難を避けてきた「疎開」、そして、戦中・戦後の「食糧難」と「厳しい学習環境」などについて書かれています。

これらはいずれも、豊かで幸運な時代を生きている私たちですが、是非後世に語り継がなければならない事柄でありましょう。

戦時中の「疎開」について調べたところ、東京・大阪のような大都会では、戦争開始時点には既に縁故・知人を頼った「任意の疎開」が推奨されていました。

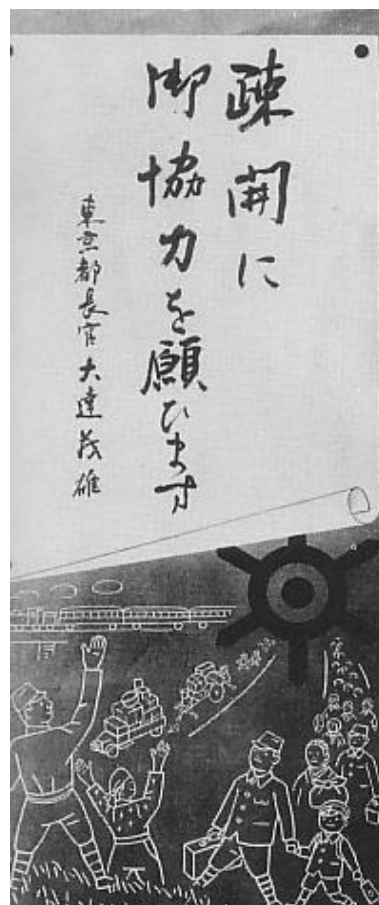
その後戦況が悪化した1944(昭和19)年の中頃になると、工業地帯を抱える大都市あるいは米軍との戦闘が予想される沖縄から、比較的安全な地方の町村への大規模で半ば強制的な「学童の集団疎開」が開始されました。そして、昭和19年9月末には全国で40万人を超える学童が疎開していたとのことです。

この集団疎開では、多くの学童が親元を離れて寂しい生活を余儀なくされました。また、その後運悪く都会の空襲により親を亡くし、戦争孤児となった学童もかなりいました。

ここ折本への「疎開」は京浜工業地帯から近いこともあって、強制的であってもこのような集団疎開ではなく、家族ぐるみの移住に近い疎開であったようです。

折本町内会長として長年尽力されてこられた眞次英一さん(昭和11年生れ)のご一家も、この時期(昭和19年8月)に神奈川区から家族ぐるみで折本に疎開して来られました。眞次さんはこの時小学2年生で、今の西原公園にあった折本小学校(正式には都田小学校の第2分教場、川和が第1分教場)に通い始めたそうです。しかし、分教場にはすぐに軍隊が駐留することになったために、学校の授業は第17話にもあるように淡島神社や大熊神社の神楽殿で細々で行われるようになったそうです。

眞次さんよりやや年上の飯島喜作さん(昭和6年生れ:3組)は、太平洋戦争開始時は4年生で分教場でしたが、5年生になると本校の都田小学校に通われました。



**昭和19年の東京都の  
ポスター  
(ウィキペディアより)**



そして、空襲が激しくなった頃には、登校途中で警報が鳴り家に引き返したり、近くの農家に飛び込んで身を潜めるような怖い経験もされ、戦闘機同士の空中戦を間近に見て機体が墜落して行くのを見たそうです。

また、家に居た時に空襲警報が鳴り、近くの防空壕(崖に横穴を奥深く掘って人が避難できるスペースを作ったもの)に皆で逃げ込んだこともあったそうです。

戦時中の食糧難の時代は誰もが大変でしたが、実家が農家の飯島さんも、農繁期は授業を休んで農作業を手伝っておられました。また、昼になれば家に戻り大麦混じりのご飯に味噌汁をかけ、かきこんで(急いで)食べては学校に行っていたそうです。

この時期に折本に疎開してきた眞次さんも大家族だったので、小学生でありながら借りた畑で野菜を育てる農作業の手伝いをよくやっていたそうです。

食糧難は戦後においては更に深刻な状況になったようですが、折本地区では幸いにも田畑や水路が近くにあったため、どじょう・なまず・ザリガニ・かえる・しじみ等の他、バッタ・いなご等も捕獲し調理して食べていた、と眞次さんは当時を回想されていました。いずれも美味で、稀にうなぎが釣れた時は最高だったそうです。

このような食糧難は1952(昭和27年)頃まで続いたようです。大変な時代でしたね。

.....

最後に、1980(昭和55)年に建立され第17話の冒頭にもある「慰霊碑」に書かれている〈碑文〉を紹介しましょう。

未曾有の国難太平洋戦は、遠く忘却の彼方へ消え去らんとしている。  
憶えばこの大戦に家郷を離れ、遠く南海の果てに、はたまた北辺の荒野に、  
祖国の安泰を念じ戦った郷土の士の多かりしことよ。  
しかれども、戦敗れ遂に戦場の華と散り、護国の鬼となられし者24名に及ぶ。  
いまここに、そのみ霊を祀り、永久の冥福を祈らんとす。  
国破れて山河あり。  
敗戦の苦難をのり越え、文化国家として再び繁栄の世は開かれてきた。  
このときにあたり、かの苦難の頃を思い起こし、平和の尊厳に目を開き、  
再び悲劇のくり返えさざることを念じ、淡島の聖地にこの碑を建つるものである。  
折本小学校校長 高橋治子 謹書

【第17話を読んで おわり】

## 《第18話 独立した頃の折本小学校》

分校のままでは不便なことが多いので、地域の人々の願いやお力で、1950(昭和25)年4月1日、都田小学校から分かれて、折本小学校が独立しました。

先生は8人で児童は200人ぐらい。1学年1クラスでそれぞれ30人ぐらいでしたが、その中には、疎開してきたお友達もいました。

学校は坂道を登りきった周りが畑ばかりの丘の上にありました。今の西原公園のところです。木造平屋が二棟の古い小さな校舎でしたが、校庭の大きな桜の木が毎年見事に咲いて、入学する1年生を喜ばせていました。

学校から眺めると、鶴見川を挟んで両側に田んぼが広がり、秋には金の絨毯を敷き詰めたようで、稲穂の波の音が聞こえてくるようでした。そして、その向こうには、小机の駅と周りの人家がかたまって見えました。

赤土に砂利の混ざった坂道は、冬の朝は霜柱でうずまり、帰りは滑りやすく、とても危険でした。雪が降ると、道の両側にある竹に雪が覆いかぶさって通れなくなり、学校を休む人もたくさんいました。



桜の木の前で

午前10時、ミルクがアルミのコップに1人1杯ずつ配られました。でも、ジャリジャリしていて味も悪く、おいしくないで嫌われました。

給食のおかずにする材料

は児童たちが交代で家から持ち寄りました。薪を燃やして、おかまで作るのですから、薪も家から運んできました。

1週間に1度だけ肉の入ったカレー汁が出ましたが、それが一番人気があって、その日が待ち遠しくて競争して食べました。この給食をたった1人のおばさんが作り続けていました。

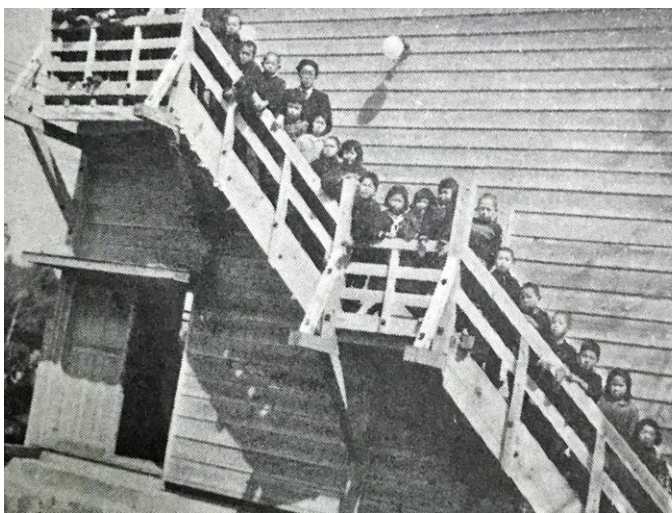
年に1回の学芸会や運動会は、児童ばかりでなく、家の人もとても楽しみにしていました。三つの教室の境は、それぞれ取り外しのできる木の戸で出来ていたのです、それを取り払って一つの広い学芸会場を作りました。

そして、そこに机を並べて、それを舞台にしました。家の人は、お芝居でも見るような気分で、涙を流しながら見ました。

運動会も朝早くから、ゴザを持って家の人が集まり、にぎわいました。児童の人数が少ないので、家の人と一緒にプログラムがたくさんあり、体育の時間と同じように、裸足になってかけたり、遊戯をしたりして楽しみました。井戸水をバケツにくんで、汚れた足を洗う時は、冷たくて心地よかったそうです。

休み時間には、女の子は家の人が藁でなってくれた丈夫な縄で、縄跳びをしたり、形のよい石を道で見つけて、それを石蹴りにつかったりして遊びました。男の子は、小刀で小枝を切って自分のゴムパチンコを作り、どんぐりや小石などを挟んで飛ばす競争をしました。

学校帰りの道草も楽しみの一つでした。近くの淡島神社の周りの山で、野いちごをとって、お菓子代わりに食べたり、サワガニをいっぱい取っこしたりして、なかなか家に帰りませんでした。途中、車が通るとうれしくて、「車がきた。」と大騒ぎしながら追いかけて、いつまでも見送っていました。まだ、車がほとんど通らなかったのも、珍しくてたまらなかったのです。



**新しく出来た2階建ての校舎**

学校が誕生して3年目、二棟あった校舎の一棟を壊して、木造二階建てのりっぱな校舎が出来ました。出来上がるまでの1年間ぐらい、児童は、近くの淡島神社の神楽殿を教室代わりにして勉強しました。どろんこになって境内を走り回ったり、家から藁や古い材木を持ってきて、先生と一緒に竪穴式の丈夫な家を作りました。その中で遊んだ面白さは格別で、いつも中は満員でした。

校旗の中に大きく刻まれている校章の野いばらは、暑さ寒さにも負けぬ強い花で、“希望”“潔白”の意味を表しています。そして、折本小のみなさんにたくさんの歴史を語っています。

**〔第18話オリジナル版 おわり〕**



## ～第18話「独立した頃の折本小学校」を読んで～

ここでは都田小学校の分教場だった折本小学校が1950(昭和25)年4月に《独立》したことが書かれています。この時、我が国は《独立国》ではなく、マッカーサー連合軍司令部(GHQ)の支配下で、政治的には極めて厳しい環境下にありました。

ちなみに、正式に独立国として主権が回復したのは、翌1951(昭和26)年9月に調印したサンフランシスコ講和条約が発効した1952(昭和27)年4月以降になります。

しかし、第17話にもあったような敗戦の痛手が生々しい『国破れて山河あり』の状態から、国全体が徐々に復興してきて明るい前途が期待できるようになった時期でもありました。

そして、今の西原公園にあった折本小が昭和25年に独立してから、今の場所に移転する昭和50年までの四半世紀(25年間)に、我が国全体が右肩上がりの経済成長を遂げることになります。



**往時を偲ばせる西原公園の桜**

そのような時代背景と戦後の自由な雰囲気の下で、折本小の子どもたちは、初めの頃はまだ食べ物や着るものも十分ではなかったでしょうが、良くない状態も徐々に改善されていき、この第18話に書かれているように晴れ晴れとした気持ちで、小学校での勉強や豊かな自然に囲まれた遊びを楽しんだことでしょう。

話の中で、『学校から眺めると、鶴見川を挟んで両側に田んぼが広がり、秋には金の絨毯を敷き詰めたようで、稲穂の波の音が聞こえてくるようでした。そして、その向こうには、小机の駅と周りの人家がかたまって見えました』と書かれていたのは、とても印象的です。

今は近辺の高台から眺めても右のように大きな建物や高速道路しか見えません。



**折本町の高台より新横浜・小机方面を望む  
(よく見ると第三京浜・環状北線・  
日産スタジアムの屋根が・・・)**

このような時期に折本小学校に通われていた方は町内に多くおられますが、6組のYさんは懐かしい当時を振り返って、1958(昭和33)年頃に撮られた次の2枚の写真を提供してくださいました。



折本小の運動会（今の西原公園にて）



小机堰での「七夕の笹流し」

左の写真は、いかにも「戦後」を思わせる活発な女の子の組体操の様子です。右の写真は、小机堰の木橋(ドンドン橋?)での恒例の七夕の笹流しだそうです。男女一緒に楽しそうですね。

しかし、その後は全国の多くの地域でそうであったように、のどかな折本の地にも開発の大波が押し寄せてきます。その顕著なものが1965(昭和40)年に折本町を南北に跨ぐようにして建設された「第三京浜道路」の開通だったのでしょ。

ただ小学校があった西原公園付近や淡島神社の周辺の景観は、折本小が移転する1975(昭和50)年頃までは以前のままであったようです。

それが大きく変わるのが、1983(昭和58)年に開通する新横浜元石川線の建設工事でした。この道路は西原公園と淡島神社の間を文字通り分断するように走り、その後折本町全体も急速に変貌を重ねて今の姿になったのは皆さんご承知のとおりです。

本当に、目まぐるしい移り変わりでしたね！

**〔第18話を読んで おわり〕**

## 《第19話 新しくなった折本小学校》

今、私たちが使っている校舎は、1975(昭和50)年に建てられました。それまでは、西原公園の所にありました。

古い校舎は普通教室が六つの小さなものでした。ところが第三京浜道路や港北ニュータウンがつくられるようになり、学校の周りにも、工場や家が次々と建てられていきました。

そして、折本小学校の児童数も、1969(昭和44)年、146名。1970(昭和45)年、191名。1971(昭和46)年、222名というように増えてきたのです。このように児童数が増え、教室が足りなくなったため、新しく学校を建てようという声があがりました。

そこで、1971(昭和46)年に、校長先生、副校長先生、地域の人たちが集まって新しい校舎を建てるための土地を探す会を作り、どこに校舎を建てたらよいか、話し合いました。その結果、すべての児童が通いやすい、学区の中央にしようという事になりました。それは、折本町と大熊町が接している所です。今の折本小学校の住所は折本町になっていますが、学校全体は折本町と大熊町の両方にまたがっているのです。

1972(昭和47)年には、会の人数が増え、折本小学校建設委員会と名づけられました。学校を建てたいと思った土地は12名の人たちが持っていました。そこで、その土地を譲ってもらうために、委員の人たちが、それぞれの家を訪ね、なぜ学校をそこに建てたいのかを説明したのです。

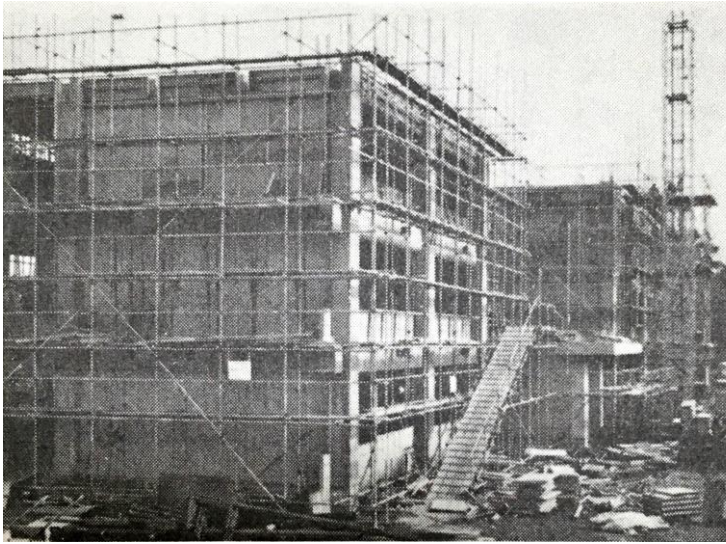
折本小学校の児童数は増え続き、教室が足りなくなりました。プレハブ校舎を建てることになりましたが、校庭が狭いので、土地を借りなければなりませんでした。

しかし、委員の人々の努力のかいも無く、いろいろな理由で、学校建設委員会をやめることになってしまいました。

ところが、1973(昭和48)年の児童数はさらに増えて、もう1棟プレハブ校舎を建てなければならなくなりました。そこで、再び、折本小学校建設委員会を作り、もう一度、学校のために土地を譲ってもらうよう、土地の持ち主にお願いしたのです。委員の人たちの努力によって、ほぼ十日間で話し合いがまとまり、学校を建てる土地が決まりました。そして、横浜市の新校舎建設計画に入れてもらったのです。

その年の秋から冬にかけて、もともと畑だった所を平らな平地にしました。今の校庭側の高い所を削って、川の低い方に土を積んだのです。





### 工事中の校舎

次の年の春から夏にかけて、安全な学校を造るためにいろいろな調査を行い、7月16日から新校舎建設工事が始まりました。

1975(昭和50)年3月20日の卒業式は新しい校舎の一部を使って行いました。

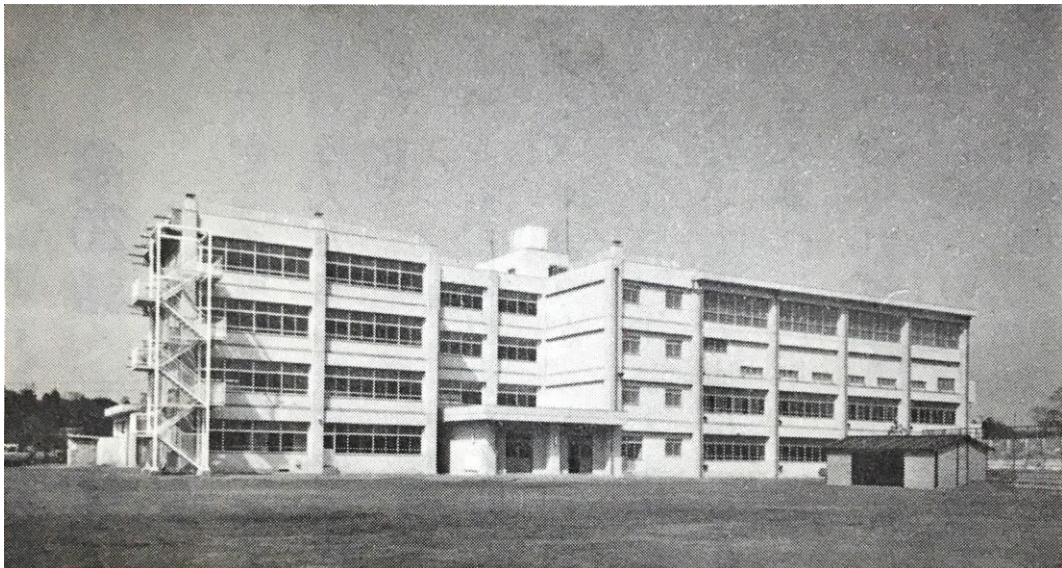
3月30日と31日には、今までの校庭の木を新しい校庭へ運び、植えました。

3月31日には建設工事がすべて終わりました。そして、4月1日から、学校の住所は、今の折本町1321番地となったのです。

4月1日に、トラック4台を使って、地域の人々、お父さん、お母さん方、先生方、合わせて80人が、学校に机や椅子、勉強に使う道具を運びました。

4月3日と4日には、先生方が運んだものを整理しました。

そして、4月5日には、新しい校舎で、始業式、入学式が行われたのです。



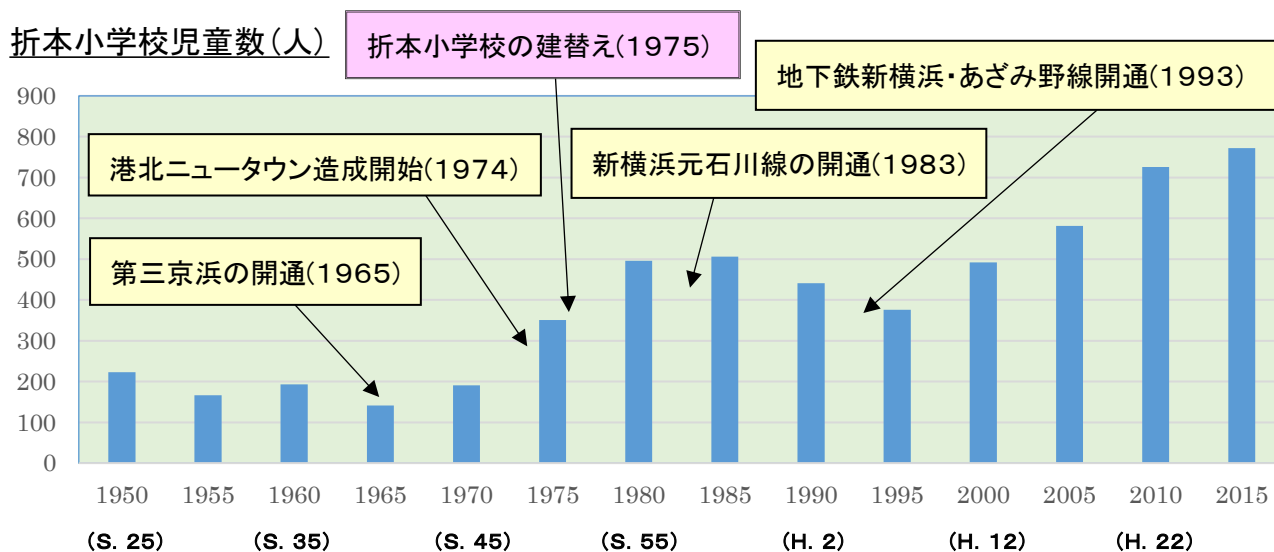
### 完成した新しい校舎

〔第19オリジナル版 おわり〕

## ～第19話「新しくなった折本小学校」を読んで～

学校の建替えというような大きな事業をやるには、多くの関係者の理解と協力が必要なのがよく分かりました。

この話では、折本小学校の児童数が増えて、西原公園にあった校舎では教室が足りなくなったことが書かれていますが、戦後70年の児童数の推移を折本小学校の資料を見せてもらって調べたところ、次のグラフのようになりました。



### 戦後70年間の折本小学校児童数の推移

このグラフを見ると、戦後20年間あまり変わらなかった児童数が1970(昭和45)年頃から1980(昭和55)年にかけて急増したこと《第1の山》、また、1995(平成7)年頃から現在まで増加していること《第2の山》がよく分かります。

ここで、第1の山は第三京浜の開通と港北ニュータウン造成開始を発端とする開発の波によるもので、第2の山は新横元石川線と地下鉄の開通による都市化によるものでしょう。

第1の山では、マンションやアパートの建設で子育て世代が増加したことでしょう。また、第2の山は現在も続いているかもしれませんが、仲町台方面の若者向けのマンション・アパートが大幅に増えてきているようですね。

なお、1985(昭和60)年から1995(平成7)年にかけての児童数の減少も気になりますが、恐らくは社会全体の景気後退でこの地域への人口流入が鈍ったのと、第1の山で増加した児童が卒業していったことがその大きな理由ではないでしょうか。



さて話を元に戻して、折本小学校の移転は、当事者である児童の視点で見るとどうだったのでしょうか。

小学校の移転時に在籍されていたSさん(1組)は、「ヤッター、新しい校舎だ！」と嬉しかったのと同時に、「学校が遠くなるなあ・・・」「プールがなくて残念だなあ・・・」と当時思ったのを覚えておられるそうです。

いずれも子どもらしい素直な感想ですね。

「学校が遠くなる」については、子どもの時と大人になってからでは距離感覚が大きく違い、ほんのちょっとの遠方でも遥か彼方の別世界のように考えていた記憶は、大人になった誰もが持っているのではないのでしょうか。

なお、移転時にはなかったプールは、2年後の1977(昭和52)年6月に出来上がったようで、この時はきっと子どもたちみんなが大喜びしたことでしょう。

せっかくの機会なので、以下に時代とともに変わっていった折本小学校の航空写真をご紹介しましょう。

写真①は、西原公園にあった頃の折本小学校です。

周りがすべて畑で、こじんまりとした2階建ての校舎と運動場があるのが印象的です。

生徒数もそんなに多くはないようですが、「オリモト」の人文字が素朴な感じでいいですね。



① 西原公園にあった折本小学校 [撮影年不明]  
(周りはすべて畑で、こじんまりとした校舎が・・・)

この頃の折本小学校に通われた方は町内にまだかなりおられるはずですが、きっと懐かしく思われることでしょう。

移転当時/1975(昭和50)年/の学校の写真は、この第19話本文に「完成した新しい校舎」として紹介されています。

西側校舎は各階が2教室の4階建てで、非常用(?)の外階段が取り付けられていま



すが、まだまだ増築計画があったようで、校舎側面には、鉄筋コンクリートの梁がむき出しの状態でした。



② 1985(昭和60)年の折本小学校

写真②は、創立35周年記念誌が発刊された1985(昭和60)年に撮られたものです。

この写真では、西側校舎が増築され、各階が4教室になっているのが分かります。

勿論、プールもありますね。

写真③は、折本小学校創立50周年の2000(平成12)年に撮られたものです。

前の写真と較べると、更に西側に校舎が増築されているのが分かりますね。



③ 2000(平成12)年の折本小学校

最後の写真④は、2014(平成26)年に撮られたものです。

校舎の外形は前の写真と同じですが、中央校舎の屋上にはソーラーパネルが設置され、省エネ化を推進しているのが分かりますね。

運動場のカラフルな模様は、生徒による野イバラの校章です。



④ 2014(平成26)年の折本小学校

かつて折本小学校に在籍されていた読者のみなさん、どこかに自分が写っていませんか！

〔第19話を読んで おわり〕

## 《第20話 変わっていく折本・大熊・川向》

バスがこの町に近づいてくると、緑が車の窓からたくさん見られるようになり、乗っている人たちの気持ちをほっとさせます。田畑の上をわたってくる風も、とてもさわやかです。

この頃、緑が少なくなり、空気が汚れたり、川の水が濁ったりして、みんなが心配していますが、私たちの町は、まだ緑も多く、空気も川もそれほど汚れていません。とても幸せなことです。

この素晴らしい自然をいつまでもこのままにしておきたいものですね。それには、町の人がみんなで力を合わせ、林や田畑や家の周りの木を大切にしたり、いろいろな工夫をして、空気や水を綺麗にしたりするよう、心がけなければなりません。

私たちの町にまだ緑が多いのは、農家が多い事にもよります。みなさんも学校の行き帰りに、田畑やビニールハウスで働いている人を見かけることがあるでしょう。

折本・大熊に農家が多いのは、横浜市からだんだん無くなっていく田畑や林を残しておき、横浜市全体の生活のための仕事が釣り合うようにしているからです。これから、この町でとれる野菜・花・植木などは、横浜の人たちの生活にとって大切なものとなるでしょう。

しかし、大熊町のバス通り近くには、大きなマンションやアパート、工場が、たくさん建つようになりました。そして、スーパーやお店も増えて、新しい街づくりが進んでいます。

これからも、もっと家やお店ができて、賑やかな町になり、暮らしが便利になると思いますが、住みよい、楽しい町にするために、町の人たちがみんな考え、話し合い、力を合わせて頑張らなくてはならないこともたくさんあります。

家が多くなり、人の行き来が激しくなると、車や人が安全に通れるようにしなければなりません。大熊町のバス通りなどは、狭いので広くしたり、よい舗装道路にしたりするとよいと思います。また、第三京浜道路や新横浜元石川線などの道路は、車の数が多いのでとても危ないので、気をつけなくてはなりませんし、交通事故を無くす工夫が大切です。東京や横浜市内などへ出かけるには便利になりましたが、みんなが安心して通れるようにするにはどうしたらよいか、よい道路にするにはどうしたらよいか、みんな考えてみましょう。

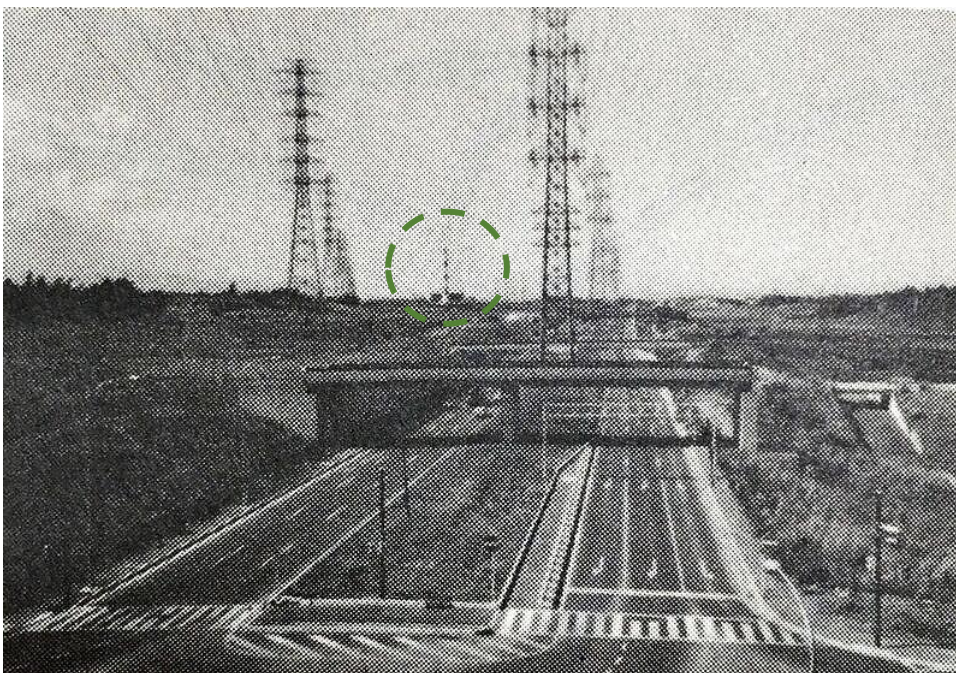
また、港北ニュータウンが出来上がると、そこにつながる道路についても考えることが大切です。



道路が良くなってくると、工場や倉庫に出入りする車が多くなり、工場などで働く人たちも、よそからたくさん通ってきます。そして町がとても賑やかになります。この頃、私たちの町にも新しい工場や倉庫、会社が建つようになりました。鶴見川の近くには、田畑が工場や倉庫に変わった様子が見られますが、これからも工場や会社が増える事でしょう。

私たちの町に工場や会社がたくさん出来る事は、新しい町が栄えていくためには良い事です。しかし、空気の汚れを無くし、やかましい音などがしないように工夫しなければなりません。

折本小学校の校舎の窓から、港北ニュータウンの様子が見えます。私たちの町と違った様子の町が隣に出来て、私たちの暮らしも楽しく、便利になってきました。港北ニュータウンは、横浜市がとても力を入れて進めている新しい街づくりです。この町には、日本中からたくさんの人々が移り住んできます。隣に暮らす私たちは、この町の人たちとも仲良くし、港北ニュータウンと私たちの町がますます栄えていくように、力を合わせていきましょう。



新しい町港北ニュータウン/1985(昭和60)年  
(新栄高校南側信号地点より江田方面を望む。  
ゴミ焼却場の煙突が小さく見える)

私たちの町のあるところは、横浜市の北の方にあたり、港や中心街からは離れていますが、この頃は、緑区・港北区が大変賑やかになり、違った横浜の姿として見直されています。学校や公園も増えて交通も便利になり、賑やかな町も多くなっ

ています。こうしたところにある折本・大熊・川向の町が、これからどのように栄えていったらよいか、横浜市全体の中での関わり合いや役割について、一人一人がしっかり考え、未来に輝く私たちの町を造りましょう。

〔第20話オリジナル版 おわり〕



## ～第20話「変わっていく折本・大熊・川向」を読んで～

約30年前に書かれたこの話は現在までの移り変わりを的確に予想し、私たちの町にとって何が大切で、私たち一人一人が何をしなければならないかがしっかりまとめられています。

私たちの町がこれから大きく発展していても、「豊かな緑」「きれいな空気」「汚れていない水」「静かな環境」そして「安全」が大事であることは、全く変わらないでしょう。

第20話の中では港北ニュータウンが発展・拡大していくことを見越して道路交通面の安全が強調されていましたが、今のところ大きな問題がないのは、地元の警察を含む多くの関係者のご努力によるものだと感謝しなければなりません。



### 新栄高校南側信号付近から港北ニュータウン方面を望む

〈右に仲町台駅近辺のマンション群と江田方面行きの道路・街路樹が、左上に横浜市資源循環局のゴミ焼却場の煙突が見える/2016(平成28)年6月撮影〉

しかし、全てがうまくいっているかと言うと、必ずしもそうではなく、中でも「ゴミ問題」は更に積極的な対応が必要な事項かもしれません。

ちなみに、自分の近所を見渡しただけでも、大量のゴミがあふれ、時にはカラスに食べ散らかされているゴミ集積所があります。

また、大きなバス道路だけでなく、身近な生活道路や小さな農道にも大小ゴミのポイ捨てが後を絶たない現実があります。

町中に散在するゴミは、町全体の景観やイメージを損ね、ひいては町に対する愛着心が薄れていくといった悪影響もあるので要注意です。

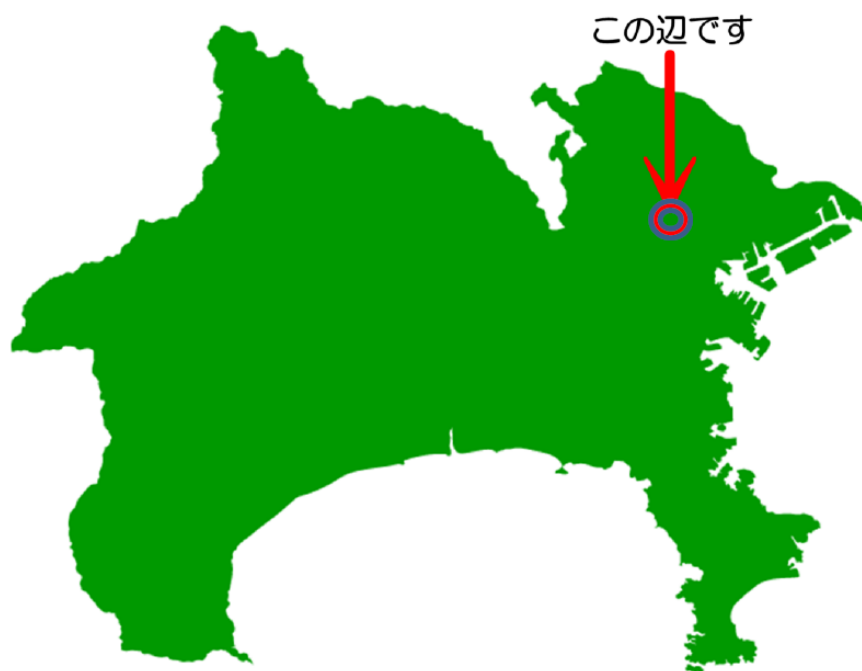
このため、折本町内会が中心となり年に2回「町内さわやか運動」と称して、みんなで町内道路の一斉清掃をやっているところですが、ゴミ問題はそう簡単に片付きそうにはありません。

ゴミ問題に対しては、国や役所のしっかりした対応だけでなく、「ゴミのポイ捨ては決してやらない」「目についたゴミは積極的に拾う」といった個人レベルの心掛けや対応も今後益々必要となってくるように思います。

このような一人一人の努力を積み重ねることで、これからも「活気」と「安らぎ」の両方があり、住んでいてよかったと誰もが思えるような折本町になっていくといいですね。

.....

#### 折本町の所在地（神奈川県横浜市都筑区折本町）

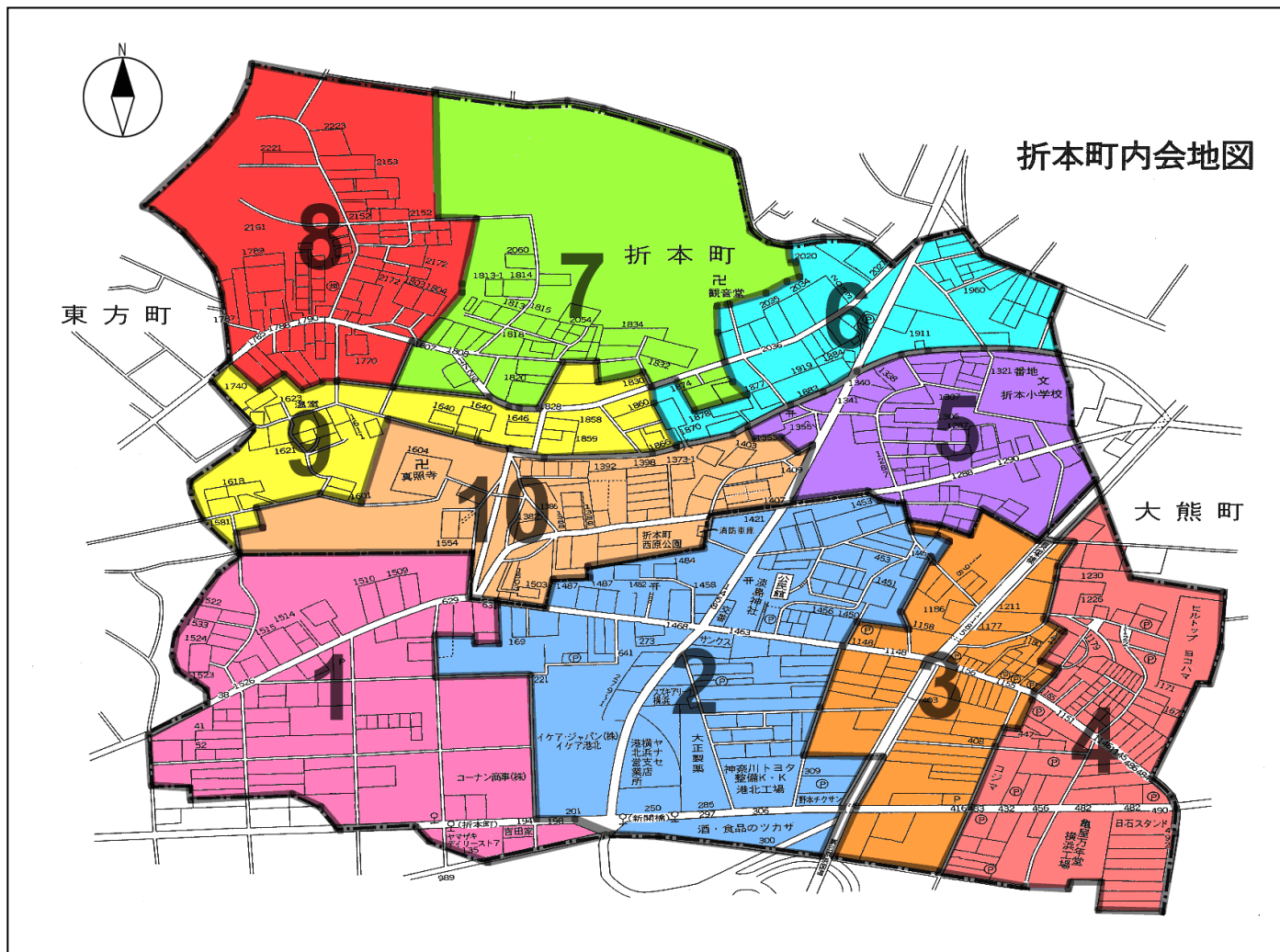


《神奈川県全図》

〔第20話を読んで おわり〕

# 【参考情報】

## ◎ 折本町内会 組境界図



### ◎ 折本町内会各組の昔の“呼び名”（第2話より）

- |              |              |
|--------------|--------------|
| 1・2組 … 「かみ」  | 3・4組 … 「ひかわ」 |
| 5・6組 … 「いち」  | 7・8組 … 「やと」  |
| 9・10組 … 「はら」 |              |

### ◎ 1～4組を「折本表(おもて)」、5～10組を「折本裏(うら)」とも言う。

（注）折本町の中央部には、大熊町—折本町—東方町—池辺町と続く丘陵地帯がある。この東西に走る丘陵地帯を境に、南側が「表」で、北側が「裏」である。



## 【あとがき】

この〈私たちの折本町の歴史〉は、2014(平成26)年10月から2016(平成28)年7月にわたって連載してきた『わたしたちのまち/リニューアル版』の第1～20話を再編し1冊に統合したものです。

〈私たちの折本町の歴史〉は、折本町の歴史を辿りながら現在の在りようを見つめ直し、文字通り《記憶遺産》として私たちの次の世代に語り継いでいくために作成した資料です。

この資料に書かれた内容で読者のみなさまの思いに繋がる部分があれば、資料作成を担当した者として大変嬉しく思います。

最後になりますが、折本小学校創立35周年記念誌を提供していただきました折本小学校の先生方、『わたしたちのまち/リニューアル版』のHP掲載と町内会回覧に対して長期間にわたり支援していただきました眞次英一前町内会長、さらに、『リニューアル版』の作成と、〈私たちの折本町の歴史〉の発行に際し協力いただきました多くのみなさま方に深くお礼を申し上げます。

折本町内会 会長 角田 勇  
折本町内会 HP編集グループ；  
中島睦夫 角田玲子  
飯島定幸 柳田千晶

\*\*\*\*\*

(補記) 以下の方々には、各話の読後感作成のためのインタビューに積極的に対応していただきました。ここにお名前を掲載させていただき感謝の意を表します。  
掲載は50音順で、敬称は略させていただきます。

飯島喜作	飯島 浩	角田和穂	角田 昇	角田 博
角田光夫	角田 稔	加藤一夫	加藤恒雄	加藤之弘
雲井耀一	城田朝成	眞次英一	山本富男	渡辺洋子
(以上、折本町)				
石関久幸	石関洋子	石関朋幸	(以上、川向町)	
長谷川正義	(以上、東方町)			
榮 秀之	藤原明美	(以上、折本小学校)		

折本町内会  
2017(平成29)年1月 発行

【保存版】

(注) 本資料の全部または一部をコピーまたは引用される  
場合は、折本町内会 HP編集グループ にご一報ください。

メールアドレス: [orimotocho@gmail.com](mailto:orimotocho@gmail.com)